

カンミールの女神ヌン (NUN) (7,135m)

その白き美しさに魅せられて



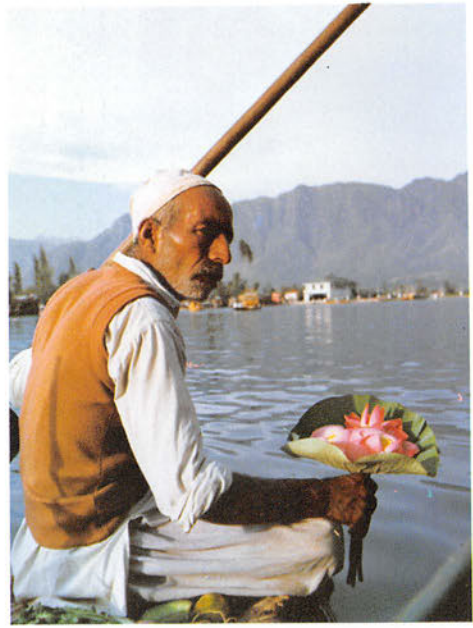
期間: 1987年 7月26日～9月5日

隊名: H A J 女子ヒマラヤ登山隊1987年

カシミールの女神ヌン^(N U N) (7.135m)

その白き美しさに魅せられて





シカラをこぐ老人(スリナガルにて)

頂稜を登る





頂上の小泉(左)と貝塚(右)



頂稜を登る



強い陽ざしと氷河の照り返しから顔を守るための白塗り



5ヶ国の交流
日本隊、スペイン隊、スイス・オーストリア合同隊



B.C. に咲く花



Happy birthday to REIKO
バースディケーキ



登頂祝いと玲子の誕生祝い

序

ヌンは、H A Jにとってゆかりの深い山である。はじめに、74年の沖氏らによる偵察、75年の西郡、山森氏らによる日印合同隊があった。この合同隊の出発までには筆舌に尽し難い数々のプロセスがあり、後のH A Jの遠征のバックボーンを形成することに測りしれない貢献をしたものである。当時の隊員の一人である保坂君は後年、自らの隊を組織して75年の無念を晴らした。

ヌンの母体は、85年コンロン女子隊であり、86年キンナウル女子隊であった。更に流れをたどれば北海道H A Jの古い歴史があり、78年トリスル隊参加後の一連の女性会員の活動を見ることができる。今回の許可取得のいきさつも含めれば、H A Jとして女性隊の初めての7,000m峰は、それなりの長いアプローチと積み重ねが開花したものといえよう。

女性のヒマラヤ登山史の中で特筆される活躍をしたクロード・コーガン婦人によって53年に初登頂されたのがヌンであり、それも同じ西稜からであったのは奇しき因縁である。この隊には2人のインド人が参加していたが、その一人がN・ジャヤール氏であった。氏は、86年にH A Jの招待で来日されたことがあり、今回、ニューデリー出発前にホテルに彼女らを訪ね激励しているが氏も大いに喜んでおられるものと思う。当時、氏は27歳の航空副官であったという。ちなみに、キンナウルも氏にとってゆかりの深い地で、86年隊はそのアドバイスを受けている。

流れのすべてにかかわりを持ち、また、小泉副隊長と一緒にトリスルを登ったといういき目からではないが、ヌン登頂成功はH A Jの歴史の中で大きな節目となるものであろう。それは、H A Jの最初の8,000m峰にも匹敵するものである。

ヌンの終りには既に次の山が語られていたという。8,000mの話題もあったと聞いている。

連めんと続く流れが更に将来に伸びることは喜ばしいことである。

願わくば、女性登山の流れが更に加速され、一方、女性隊にとどまることなくH A J隊として更に高いレベルを共に追求してほしいと思う。

一つの夢が実現した今、彼女らが次にどのような素敵な夢をふくらませることができるか、果たしてそれを実現できるか、期して待ちたいものである。

1988年7月

日本ヒマラヤ協会 専務理事 稲田 定重

ご あ い さ つ

1987年8月27日12時45分「キャンプ2、キャンプ2、こちらアタック隊です。エー、ただいま頂上に着きました……」小泉副隊長の息苦しさそうな声が届いた。ベースキャンプを設営してから23日、夢が芽生えてから2年がたった。

1985年8月25、27の両日、日中婦人友好登山隊は崑崙山脈の八花氷山(5,850m)に初登頂した。この登山隊で友情・信頼が培われ、またどこかの山と一緒に登りたい。できればヒマラヤの7,000m峰に、との夢を抱いて帰国した。翌年5月報告書を発行し、崑崙の仕事全てを終えた。そして崑崙の夢を現実のものにするための活動が始まった。

休暇取得などの勤務条件、登山技術の問題等を考慮して登頂の可能性のある7,000m峰を研究し、渉外活動を展開したところ幸にもヌン西稜の許可を取得することができた。

隊員5人は居住地が北海道と主都圏とに分れているが、連絡を密にして国内準備をこなし7月26日成田を出発。インドでの渉外その他の用務を済ませて、8月4日4,100mにベースキャンプを設け登山活動を始めた。ルート工作に荷上げにと、準備活動に引き続き全員が持てる力をフルに出して頑張り、隊員2人と高所ポーター1人が頂上に立ち、夢を実現させることができた。

高所順応、登山期間等から全員が頂上を踏むということはできなかったが、ヌンを目指して活動してきたことは、必ず次のステップになるであろう。実際、登山活動が終りに近づくとき次はどの山を考えているかが話題になった。8,000m峰に、あるいは標高に関係なく興味のある地域にある山に等々の夢が芽生えている。既に寺沢は今年の夏、中国のゲネ峰に登頂し、次いでパキスタンのガッシャーブルムⅡの準備中である。他の4人も仕事とのバランスをはかりながら、次の計画を模索している。

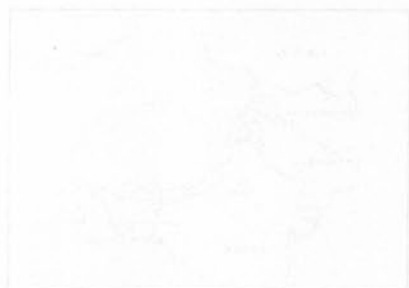
1985年中国の崑崙山脈、'86年インドのキンナウルカイルス、今回のヌンと3年連続してH A J 女子隊が組まれたが、4回目、5回目のH A J 女子隊が育まれることを願ってやまない。

最後に、この計画の発端から適切な助言と手助けして下さいましたH A J の諸先輩をはじめ、御支援、御協力を賜った職場の皆様と、多くの企業、仲間から心からお礼を申し上げます。

1988年8月

隊長 木下祥子

要約の図情 目 次



グラビア

序	日本ヒマラヤ協会専務理事 稲田 定重	1
ごあいさつ	隊長 木下 祥子	2
目次		3
計画の概要		4
ヌン峰の概要		5
隊員紹介		6
行動記録		11
はじめに		13
行動記録		14
到達高度による個人別行動表		26
登山をおえて		30
担務報告		31
夢を語る		41
登山雑感		50
ネパール紀行		52
EXPEDITION REPORT		56
協力者名簿		60
編集後記		61



計画の概要

目標の山・ 遠征の目的

1. 目標の山
カシミール・ヒマラヤ ヌン峰
(Mt.NUN)
—7,135m—
2. 登山期間
1987年7月26日～9月5日
3. 遠征の目的
西陵からのヌン峰登頂

隊の名称・ 構成

1. 隊の名称
H A J 女子ヒマラヤ登山隊1987年
(英文名) HAJ LADIES HIMALAYAN
EXPEDITION 1987
(略 称) H L H E—87
2. 派遣母体
日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION
OF JAPAN (H A J)
3. 隊の構成
隊 長 木下 祥子
副隊長 小泉 恵子

隊 員 市川 春代
寺沢 玲子
貝塚 珠樹

リエゾン・オフィサー マラ・ホンナティ
高所ポーター カルマ・シェルバ
パサン・シェルバ
コック ラクパ・タマンガ

4. 推進の組織

H A J 女子ヒマラヤ登山隊実行委員会
会 長 柴田金之助
(日本ヒマラヤ協会々長)
実行委員長 稲田 定重
(— 同 — 専務理事)
副実行委員長 木下 祥子
(登山隊々長)
事 務 局 長 山森 欣一
(日本ヒマラヤ協会事務局長)
委 員 阿部 淳、飛田 和夫
尾形 好雄、登山隊々員
事 務 局
〒160 東京都新宿区高田馬場 3—23
— 1

淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会 ☎03—367—8521

— 現地連絡先 —

c/o Shikhar Travel (P) Ltd.,
209, Competent House, F-14 Middle Ci-
rcle, Connaught Circus, New Delhi-1100
001, INDIA.

Tlx : 31—62664 SHIK IN

Tel : 331—2444, 331—2666

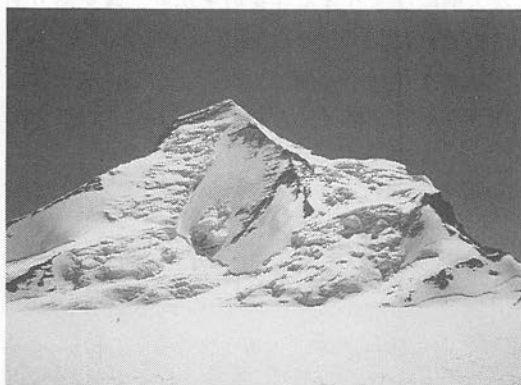
位置と山容

ヌン峰(7,135m)は、ジャム&カシミール州の主都スリナガールの東部のヌン・クン山群に位置し、この山群の盟主がヌン峰である。隣接峰としてクン(KUN, 7,077m)、ピナクル・ピーク(PINACLE PEAK, 6,930m)、ホワイト・ニードル(WHITE NEEDLE, 6,600m)などがそびえる。

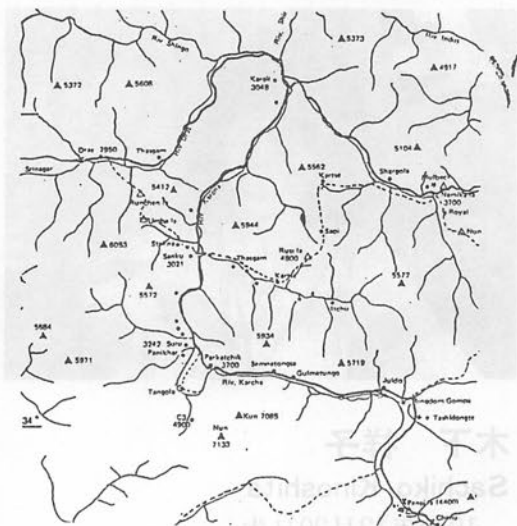
一般には、ヌン・クンと続けて呼ばれているが全く別の山である。ヌン峰は別名「セル＝塩山」とも呼ばれており、全山雪に覆われたどっしりとした三角錐の山で、まさに純白の塩の塊を思わせるような山容でそびえている。隣接する黒々としたクンの岩山とは対比的である。

登山史

この山群への偵察は、1898年イギリス人がグルカ兵を連れて山岳探検と訓練を目的に入ったのが最初で、以後、1902年にはアーサー・ネーブ博士とパートナー師が東面のシャフト氷河に入



ヌン峰(7,135m)スノーブフトーから



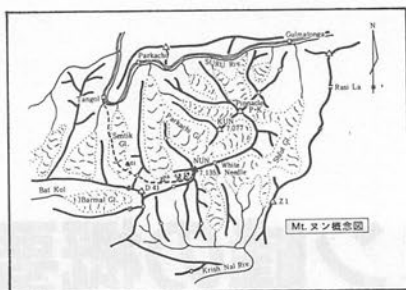
り、1904年にはヒマラヤの探検家として名高いワークマン夫妻がこの山群第三の高峰、ピナクル・ピークに初登頂した。

ヌン峰の初登頂は、エベレストやナンガパルバットの8,000m峰が登られた1953年の8月にベルナール・ピエール隊長の率いるフランス隊によってなされた。この頃は、スリナガル〜レー間の道路は政治的理由で通行不能となっていた為、アプローチは南面から迫りファリダバード谷の上部、4,700mにBCを設けてヌン峰西稜より登頂している。

アプローチ

西面からのアプローチは、大変交通の便が良く、インド国内線でスリナガルまで飛び、バスをチャーターすればキャラバンなしでセンティック氷河の出合うタンゴール村まで入れる。

村の北斜面を約2時間ほど急登し、センティック氷河から流れ出る川の側に隊荷を集結してBCを設営する。



隊員紹介



木下 祥子
Sachiko Kinoshita
1943年12月 生

- ① 隊長、会計
- ② 札幌北稜クラブ
- ③ 札幌市南区役所

始めはいやがっていた「オカアサン」のニックネームも、登山終了の頃には自ら「オカアサン」がご飯を作って待っているから、早く帰ってネ。に変わっていた。もう少し肩の力を抜いたら、もっと楽になれるかも…。

頂上は踏めなくても、それ以上の“何か”を勝ち得たい。次期遠征のプランを練っていると聞く。オカアサン、がんばって！

 (R, T) 

小泉 恵子
Keiko Koizumi
1954年1月 生

- ① 副隊長、梱包・輸送、渉外
- ② 山岳会朱蘭
- ③ 日本社会事業大学附属こども学園

抜群の登攀技術、判断力、他の隊員がホレ込んでしまうほどの根性とうらやむほどの食欲(?)で、終始ルート工作にあたる。しかし、決して豪傑ではなく、周囲に気を配るあたたかな人柄にひょうきんさをのぞかせ、隊を盛りあげてくれた。

結婚1年めの参加で、キャンプでの味付けは「ウーン、合格!」と認められる。(H. I)

①任務分担 ②所属山岳会 ③職業



市川 春代

Haruyo Ichikawa

1950年1月 生

- ① 食糧
- ② 美唄岳友会
- ③ 苫小牧市立ひまわり保育園

'85年の崑崙では、「チベットの花嫁」といわれ、またまた今回も「インド奥地の花嫁」と謳われ、出かける国の先々で「花嫁」と呼ばれる貴重な存在。

登山中は、C4建設まで、先頭でルート工作にあたるが、順応しきれず、アタック体制に入る直前で、自ら勇気ある決断を下し、断腸の思いでC2に降りた。料理好きで、ケーキ&クッキー作りは名人芸。常に豪快な笑いと繊細な心遣いで、チーム作りに大きく貢献した。

(K. K)



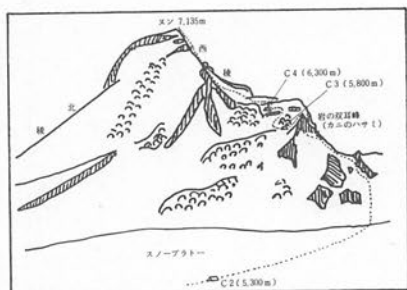
寺沢 玲子

Reiko Terasawa

1951年8月 生

- ① 渉外、装備
- ② わらじの仲間
- ③ 主婦

隊の中で唯一ともに英語が話せる貴重な人材。入山前の渉外の難題を、豊富な知識と巧みな語学力と、持ち前の温厚さで解決。不良主婦と異名を持ちながらも、本当はナイーブな乙女座のヒト。頂上で旗を振る日を夢みて、まだまだ情熱は山に傾けている。これからも、やっぱりウルトラ不良主婦は健在だろう。(T. K)



貝塚 珠樹

Tamaki Kaizuka

1961年3月 生

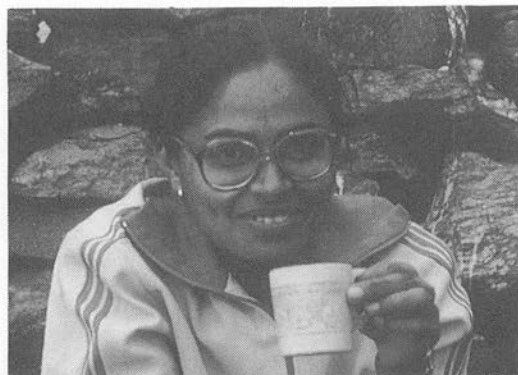
- ① 医療、記録
- ② 札幌山岳会
- ③ 北海道大学附属病院

“おばさんチーム”の唯一の20代。

初めて会った印象は現代子。話していると仕事に対する姿勢が真摯で、その点にホレてしまい是非でもメンバーに引込みたかった。

よく気が付き、よく動く。そしてチャーミングな笑顔で日印皆んなのアイドル。初めてスノープラントに上がった日、西稜を登る自分の姿をイメージし、そのとおりにしてしまった。

可能性いっぱいの20代、仕事、登山の双方に大きく飛躍してほしい。(S. K)



Mala HONNATI (33歳)

リエゾンオフィサー

理性的で、しかも笑顔が素敵な銀行員。日本流に言えばキャリア・ウーマン。

女性の自立について確固たる意見を持ち、そのことを話し出すと終わることを知らない。ただし、最後まで一緒に議論できるのは英会話の流暢な寺沢のみなのは残念。

ダーズリン登山学校の卒業であるが登山の経験は少ない。C2かC3まで登ることを希望していたが、諸々の事情で最高高度はC1であった。ベジタリアン。

今年の1月～3月カシミールでスキーをしたとの便りが届いた。(S. K)



カルマ・シェルパ(43歳)

高所ポーター

通称「ノボルちゃん」。現内閣総理大臣に「そっくり」なのだ。無口だが、数多くの遠征経験から、言わなくても通じる勘の良さを持ち合わせ、英語がほとんど話せないという欠点をみごとにカバーしている。「ヤン中」で、C4はタバコが切れると落ち着かず、萬金油をトイレットペーパーにたっぷり染み込ませ、細かく刻んで巻き直し吸い、頂上では、持参したお菓子と小銭を供え、真面目な顔つきでお祈りをしていた。

(K. K)



パサン・シェルパ(19歳)

高所ポーター

ダージリン在住の自称21歳(19歳?)。なぜかいつも寺沢と一緒に。コックのラクパと、けなしの煙草を分けあっている姿が印象的だった。自ら登頂出来なかった無念さは相当なものだったようである。

高所ポーターとして何処かの頂に立つ日が来ることを、信じている。

(R. T)



ラクパ・タマンズ(22歳)

コック

皆から「ラクパ。ラクパ」と、可愛いがられ、持ち前の明るさで日本食通の彼の働きぶりには、何度救われたことか。B Cに戻って来た時に出迎えてくれた、彼特製の花のアーチと風車、そして、みそ汁とバースデーケーキにみた彼の優しさと機転には隊員一同感激させられっぱなしだった。

(T. K)



C₃—C₄のハンギンググレシャー

行 動 記 録

はじめに

1988年8月25、27日の両日、日中婦人友好登山隊は、崑崙山脈の一角、5850mの八花氷山に初登頂した。この登山で友情、信頼が生まれ、またどこかの山と一緒に登りたい。できればヒマラヤの7,000mに！との夢を抱いて帰国した。

次の目標とすべき7,000m峰をあれこれ考えてみるが、崑崙の仕事の片付けなければならず具体的なものにならないまま過ぎた。1986年5月報告書が出来上がると、崑崙夢を夢のまま終わらせたくない、是非実現させようとの思いが膨らんでいった。

同年8月、小泉が大雪山に登るために北海道を訪れ、1年ぶりに崑崙のメンバーが顔をあわせ、これを機会に次回どうするのか検討した。技術的な問題や、それぞれの置かれている勤務条件などをも考慮して、来年の夏にインドの山、できれば7,000m峰を目指すことを決めた。この時点で参加見込の木下、小泉、市川の3人で早速資料調べを始めた。そして、サトバントとクンの7,000m 2座と7,000m弱のケダル・ドームを候補にあげて、9月インドのマナリで開催される『第4回ヒマラヤ登山観光会議』に出席のため訪印する日本ヒマラヤ協会(HAJ)理事の阿迎淳氏にIMFへの仮申請を依頼した。

その結果は、1988年の6～9月は私達の希望する山及び7,000峰は既に予約済みであり山が実施年を変更しなければならなかった。3人の職場の状況から延期は難しく、来年実施を前提にガンゴトリの未だ予約の入っていない6,500m以上の山を選定することとして、再度山の研究を始めた。

12月初めHAJ専務理事の稲田定重氏からシカール社のクマール氏が来日しているので、小泉さんに会いにってもらい希望する山について相談してみるといいでしょう、との助言があった。小泉は通訳の寺沢玲子氏(3月に参加が決まる)とともにクマール氏に会い、私達の希望を伝えたところ、クマール氏は直ちにIMF

と連絡を取りリヌン西陵の内諾を得た。

こうして7,000m峰の夢は現実のものへと歩み始めた。

当初から日頃海外の山に興味を持っている友人、知人に参加を呼び掛けてきたが、山が決まると一段と熱が入った。しかし、ヒマラヤに関心があっても休暇や負担金の都合で参加できないとの答えばかりが返ってきた。ようやく群馬の堀三津子さんから参加したいとの返事があった。

1987年1月にHAJ主催のインドヒマラヤ会議があり、木下、小泉、堀が参加しインドの最新の情報を収集するとともに、経験者から助言を得た。またこの会議に、先日クマール氏との会見の際通訳を努めてくれた寺沢氏が、昨年の日印女子合同隊(キンナウルカイラス)の隊長を務め、バネラートとして参加しており助言を寄せてくれた。

インドヒマラヤ会議のあとで堀が家庭の事情で参加できなくなり、札幌の貝塚と埼玉の寺沢の参加が決まった。隊員5人、なんとかヌン峰を取り組める体制が整った。

隊員の居住地为東京、埼玉、北海道(札幌、苫小牧)と分散しており一同に会してのミーティングは1回しか持てなかったが、担務を大まかに東京圏と北海道に分けて電話、手紙で連絡を密にしながら準備を進めた。しかし、すべてが順調にいったわけではなく、5月に小泉の実家が火災に遇い、その後始末のため準備活動は一時中断、それどころか参加自体が危ぶまれた。また市川が休暇が取得できるかどうかはつきりせず全日程参加が難しい状態であった。こういう状況でも準備は進めなければならない。東京分の仕事は寺沢がHAJ事務局の尾形好雄氏の全面的な協力を得て進めた。

国内準備をやり終える見通しがついたころ、小泉の実家の再建の目処がたち、市川の休暇の問題も解決して5人揃って出発の日を迎えることができた。



行動記録

日本出発からBCまで

日本出発、汗を流しての準備

7月25日

明日の出発を控え、全員揃っての2度目のミーティングをHAJ事務所で行う。事務局の尾形好雄氏から関係書類の引継ぎとインドにおける注意事項について話があり、その後壮行の宴に移る。

7月26日

小泉、寺沢の友人、家族に見送られて12時30分エアーインディアで成田を発つ。機上の人となり国内準備から解放され早々にまどろむ人、改めて資料や書類に目をとおす人、日本を離れる前に完成できなかった原稿の仕上げにかかる人、5人5様に過す。

11時間余りの飛行でニューデリー着。空港ビルから出ると焼け付くように暑い、湿気が少く意外と不快な感じがしない。出迎えのシカル社の車でYMCAホテルへ。明日の予定を打合せて就寝。

7月27日

全員で挨拶と打合せのためシカル社に出かける。クマール社長との打合せはてきばき進む。そして高所ポーター2人の紹介があった。43歳のヌン登頂経験者のカルマと19歳のバサン、2人ともダージリン出身のシェルパで日本人と似た風貌なので親しみやすいのがなによりだ。

シカル社を辞してから準備のため二手に分かれて行動。木下、寺沢はまずIMFに挨拶と事務手続きに向かう。事務局長のカトチ氏と寺沢の友人でマナリ登山学校のインストラクター、マハビール氏から、今年のカシミールは異常気象で5月下旬にスリナガルで降雪、6月

～7月のフランス隊（ヌン西陵のスキー滑降とパラバント飛行に成功）はスノープラトードまでのラッセル。7月20日ドイツ隊がクンで3人が滑落し重傷で入院等の情報を得る。次に日本大使館に挨拶、そして郵便局に寄ってホテルに戻る。

小泉、市川、貝塚はシカル社の倉庫に保管してあるHAJの装備をホテルに運び整理をする。高温多湿の風通しの悪い倉庫での保管のため装備が消耗気味だ。

7月28日

今日も二手に分かれて行動。木下、寺沢はシカル社で打合せとエージェント料の仮支払をしてTripathi氏とともに別送品の通関に行く。Tripathi氏が手際良く手続きを済ませる。しかし、朝若干出遅れたことと、割り当てられた担当官が非常に仕事熱心で(?)徹底的に荷を調べるため、私たちの番が来ない。「私たちは明日スリナガルに出発しなければならない」との必死の訴えも聞き入れてくれず、荷を引き出すことができなかった。

小泉、市川、貝塚はスーパーバザールで買い出しと、デボ装備の整理を行う。

クマール氏から夕食の招待があり、氏の自宅を訪問。インド料理とマンゴーに舌鼓を打ち、また夫人とのおしゃれの話が盛りあがる。





7月29日

木下、寺沢はTripathi氏とともに再度通関に行く。昨日と担当官が変わり、3箱オープンしただけでO. Kとなる。しかし、書類の手違いで荷を引き出せないため、Tripathi氏に委任してホテルに戻る。午後からクマール氏とともにIMFに行く。事務手続きの後、明日デリー到着予定のリエゾン・オフィサーが来ており紹介される。銀行に勤めるマラ・ホンナティさん、C2かC3まで登りたいと希望している。ホテルまで御足労願ひ支給装備、貸与装備の確認をしてもらう。

小泉、市川、貝塚はデボ品を今回使用するものとそうでないものに分ける。

夕方、寺沢の知人で、IMF前副総裁のジャヤール氏が見えられた。1953年ヌン初登時の隊員であった氏には、女子隊による計画は感慨無量のような。クロード・コーガンのサイン入り本「NUN. KUN」を貸して下さった。

梱包作業と礼状書きで今夜も日付が替ってからの就寝となる。

水郷の都スリナガールからBCへ

7月30日

今日デリーを発つので、これまでの経過をH A Jの尾形氏に電話で報告。めずらしく待ち時間なしでつながった。

朝食の後、今回使用しないデボ品を倉庫に戻す、貴重品をシカル社に預ける、リエゾン・オフィサー等の食料の契約をする等慌しく仕事を片付ける。

隊員5人とリエゾン・オフィサー（私たちは彼女をMiss.Malaと呼んでいた）、以下マラさんと記する）車やポーター手配のためBCまで同行のビスト氏は、日本からの別送品500kgに隊員が手持した分、デボ品、購入分が加わり

800kgになった荷とともに13時20分空路スリナガールに向う。

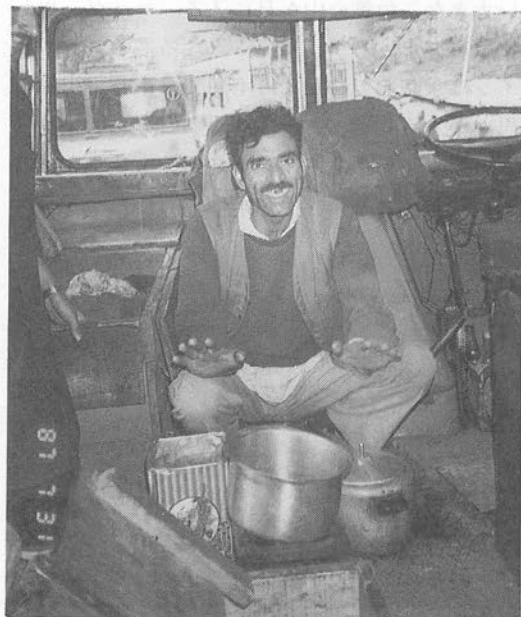
1時間余りのフライトでスリナガールに着くと「ウーン、ここは日本で言えば北海道ね」と誰かが言ったように、暑いデリーと比べ快適な気候だ。16時40分ハウスボートに落ち着き、お茶の後シカラ・ボートで湖水巡りをする。

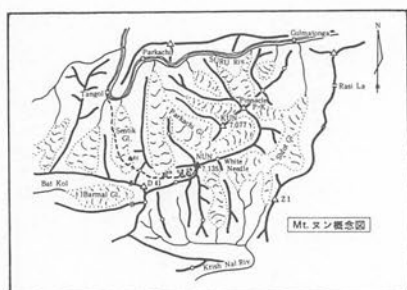
陸路で来たカマルとバサノ、コックのラクバとハウスボートで合流する。

7月31日

朝全員で州政府観光局に出向くが、登山セクション責任者のアシュラフ氏が不在で、夕方再訪問することにして辞する。その合間にムガール庭園を見物し、ちょっと観光気分を味わう。

約束の17時にマラさん、木下、小泉、寺沢は観光局に行くがアシュラフ氏は戻っておらず担当官と打合せをする。市川、貝塚はビスト氏とともに買い出しにバザールを回るが、標識用ボール用の竹の類似品探しに遅くまでかかった。





8月1日

8時50分チャーターバスで出発。ソナマルグの繁華街を通過しその少し先で、奥からの車待ちのため1時間半の休憩となる。ところが、3時間、4時間待っても一向に動く気配がない。この道路ではこのようなことは珍しくないのか運転手は炊事用具一式を積んでおり、車内で調理を始めた。

8時間待つて出発。陽はとくに沈んでおり車窓からの景色は望むべくもない。真夜中1時過ぎカルギルのホテル・ゾーヅラに着いた。

8月2日

日曜日のため官公庁は休みであるが警察署長が会ってくれたのでカルギルを出発。昨日は夜間の旅で気付かなかったが、スル川沿いの道から望む風景は灰褐色の山肌が続き荒涼とした感じた。時折現われる緑と集落は心をなごませてくれる。

2時間ほど走って道路が大きく曲ると突然白い大きな三角錐の山が目に入る。ヌンだ。思わず歓声を上げるが、ルートとなる右手スカイラインは予想していたよりも急で身も心も引締る思いがする。

パニカルのポリスオフィスでチェックを済ませ、15時タンゴールの宿泊地に着いた。すぐに



村の人たちが集まって来て、荷降ろしやテントを張るのをいつまでも見ている。カルギルのエージェントとポーター頭がピスト氏と打合せをしている。

8月3日(曇り1時雨)

3時頃から激しい雨がテントを打つが起床時刻の6時には上がっていた。

今日は順応のためにBCまでの往復。ポーターはプラパールボックスを背に三三五五出発。私たちも少し遅れて9時に出発する。幕営地の背後のガレを抜け踏跡程度の道に出、谷を渡って高山植物の咲く山腹をゆっくり登って行くと、整備された道に出る。ジグザグ道が上へと続いている。上部が雪に覆われている。ポーターは左手の岩場を軽々と登るが、マラさんには難しいと判断して、雪壁に足場を切り、ロープを張る。

少し下ってセンチンク氷河から流れ出る川の左岸をBC(4,100m)とする。石を積んだ囲い(屋根のない石小屋)や紙の小片が目につき人間臭さを感じる。しかし、毎年数隊が訪れるのに、汚れていないというのが第一印象だ。正面にD41が見える快適な場所だ。荷を石小屋に置いて下山。タンゴールの村が近づいた頃から激しい雨が降る。

今日はBCまで4時間半、下り2時間かかった。

8月4日(曇り)

体調の優れない貝塚と付添いの寺沢と若干の
グラブールボックスをタンゴールに残してBC
入り。2時間かかって4つのテントを張る。隊
員5人の生活の場となるカマボコ型のテントは
快適な生活を約束してくれるだけの広さがあ
る。

お茶の後、パサンに食料等をタンゴールの2人に届けてもらう。隊員は荷の整理、ラクパと



カルマはキッチンの整備を行う。

寺沢、貝塚はカルギルのエージェントの案内でタンゴールの周辺を散策する。

登山活動

雄大な眺めのC1

8月5日（曇り、夜間雨）

BC-C1はポーターが運ぶ重量が18kgであり、プラパールボックスの重量を調整した後、隊員は10kg位の荷を背負ってC1建設に登る。石を敷いて整備された道が奥へと延びている。15分位で道が切れてモレーン歩きとなる。川を右岸に渡ったあたりから雪になり、急な雪壁を登る。不安定なガレ場を急登して上部モレーンに出る。台地上を少し進むと、流れの対岸にテントが見える。センチンク氷河が左に曲がるあたりで標高4,450m付近である。カルマからスペイン隊と知らされる。挨拶に遠回りするのも大変なので、別の機会に寄ろうと考えて進む。

スペイン隊の1人が登ってくるので歩を止める。近くまで来ると女性とわかる。お互いに自己紹介する。スペイン隊は9人で女性はのうち2人、ルートは北稜（北西稜か？）。アイスフォールは易しいがロープをフィックスしてあるので使用してかまわない、との言葉にお礼と成功を願い別れる。

左手の脆そうな岩壁を回り込むようにして急斜面を登る。歩く速度が鈍くなる。あえぎあえぎ一步一步登っていくとキャンプの跡があった。右岸の縞模様の大岩壁の基部がC1(4,900m)だ。上からの落石が気掛りだが先人達が使った場であり大丈夫だろう。

眼下の広大なセンチンク氷河、視線を上に移すとD45、そこから右にアイスフォール、縞

模様の岩壁と続き、雄大な眺めのC1だ。

アイスフォールに動く人影が見える。双眼鏡でアイスフォールを観察するが、クレバスがはっきりしない。テントを張って下山。

寺沢、貝塚、バサンがBC入り。荷も3日ばかりで全てBCに集結した。全員BCに揃い、そして任務を終えたビスト氏が明日一旦下山するのでBC開きと送別会を兼ねた宴を持つ。アルコールが入り陽気になったカルマはダンスに興じる。

マラさんと隊員はビスト氏に託すため遅くまで手紙書きに精を出す。



8月6日（晴後曇り）

寺沢、貝塚、マラさんは順応のためC1往復。ポーター5人とバサン、コックのラクバはC1に荷上げ。木下、小泉、市川は休養、とはいえBC整理に1日かかる。

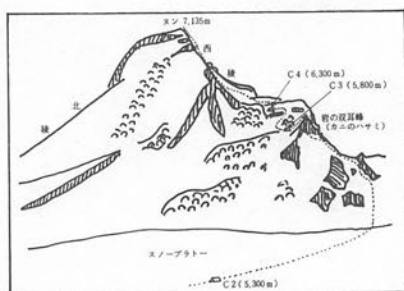
8月7日（晴後曇り）

小泉、市川はC1入り、カルマはC1に荷上げてBCに戻る。木下、寺沢、貝塚、バサンは装備・食糧の整理を兼ねて休養。

広大なスノープラトートの端にC2

8月8日（晴後にわか雨）

今日からスノートレを登山靴、アイゼンに履



き替えての行動となる。スノープラトーから見えるヌン峰がどう私たちを迎えてくれるのか、不安と期待を持って小泉、市川はC1を出発する。

アイスフォールの400mの登りは、先月中旬より北稜からの登頂を目指しているスペイン隊のフィックスロープを使わせてもらう。このルート工作に丸1日を要すると考えていたので大いに助かる。アイスフォールにはまだ陽があたりずロープが凍っており、ユマールが利かないので注意して登る。アイスフォールの下部は急で50度はあるだろう。幾つかのクレバスを飛び越え、約250mのフィックスが終了すると、右手にD41を見ながらの緩やかな登りとなる。ここからスリナガールでようやく手に入れた竹竿を立てていく。

スノープラトーは広大な雪原である。スペイン隊の連絡官が何度も「Very far」と話していたのが頷ける。ヌン峰を前方にスノープラトーを進み、西稜の取付寄りにC2を建設し、ガスがかかってきたので早々に下山する。

間近に見る西稜、特に頂上直下や通称「カニのハサミ」は私たちが予想していた以上に傾斜があり、私たちの力でやれるかどうか不安になる。北稜に登攀中のスペイン隊を確認する。

木下、寺沢、貝塚、カルマ、パサンはC1に荷上げて、装備、食料の保管を工夫し整理する。マラさんも同行するが左膝が痛むため、スペイン隊のキャンプ手前よりBCに戻る。

8月9日(晴時々曇り)

小泉、市川はC1からBCに下る。木下、寺沢、貝塚、カルマはC1入り、途中両パーティが出会い、お互いの状況を報告。

8月10日(晴後曇り)

C1泊まりの4人はC2に荷上げ、アイスフォールを登り、スノープラトーに出、標識用ボ

ールを短間隔に立てながら、一昨日の小泉、市川のトレースをたどる。

P5,600m(私たちはアイスクリームと呼んだ)の北東基部のあたりでC2の位置について検討する。荷を置き、頭痛のひどい寺沢を残してC2を確認に行くが、1時間余り歩いても見当たらないが、寺沢の体調も気になるので引き返す。帰りはスノープラトーにクレバスが見られるようになった。

寺沢は1人C1に残っていたマラさんに付添ってBCに下る。

小泉、市川はBC休養。パサンはC1に荷上げ。

C3建設を前にローテーションを再検討する。ルート工作と荷上げの効率の良い人員配置と隊員5人と高所ポーター2人の体調を併せて検討し、小泉、市川にカルマを加えて当面ルート工作に当たる。そのためカルマは明日C1で休養して、小泉たちに合流することとする。



8月11日(晴後みぞれ)

木下、貝塚は昨日のデポ品をC2に収納に行く。デポ地から20kg弱の荷を背負って、昨日よりも上部にルートを取ってC2を目指すと、遠くからテントが確認できた。テント付近はクレバスが開き始めているので移動させる。安全な



場所を探す、どこもクレパスがあり、昨日のデポ地にテントを移す。

C 1 入りした小泉、市川との定時交信で、スペイン隊のリエゾンがアタックに行った3人が戻らず交信も途絶えているので心配だとスノープラトーに探しに登った、との連絡がある。もし捜索協力の要請があった場合の対応をあれこれ考えていると、動く点が目に入った。安心してC 1 に下り、小泉、市川とお互いの状況を報告して、今後の予定について打合せをして荷上げのバサンとともにBCに下る。

C 1 泊まりの3人はスペイン隊の3人をささやかなTea partyに招く。彼等から頂上直下まで登ったが登頂断念したこと、他の5人は日数ギリギリまでアタック態勢に入ることなどを聞く。お互いに片言の英語でなんとか通じるものである。

BC休養の寺沢はマラさんからベジタリアン食を全て用意するはずだったのに約束が守られていない、とのクレームを受けた。

悪天候に阻まれC 3 建設遅れる

8月12日（曇り後雪又は雨）

小泉、市川、カルマはC 3 建設のためにC 2 入り。カルマ用の2人用テントを張るがポールが折れていた。2時頃から雪となるが、湿雪でテントが濡れる。外はガスがかかっている。時折ガスが切れるが、山はほとんどガスの中。

木下、寺沢、貝塚はBC休養。C 2 とトランシーバー交信できず。

8月13日（曇り後雪又は雨）

C 2 は相変らずガスに包まれている。C 3 建設の出端をくじかれガッカリする。シュラフの中でうとうとしているとカルマが「ラムロー！ラムロー！」と大声で起こしに来る。テントから顔を出すとヌンが少しずつ姿を現わし始めて

いる。急いで朝食を摂り出発する。しかし、途中よりホワイトアウトの状態になり、西稜を少し登ったところにロープ、スノーバー類をデポしC 2 に戻る。

今日C 1 に泊る寺沢、バサンとBC休養の木下、貝塚とマラさんはフィックスロープを使用させてもらったお礼にスペイン隊のキャンプを訪れる。お茶をごちそうになり、山、休暇、女性の自立などに話がはずみ、日印西の友好の一時を過ごす。

今日も小泉パーティと交信がとれない。

8月14日（曇り後晴）

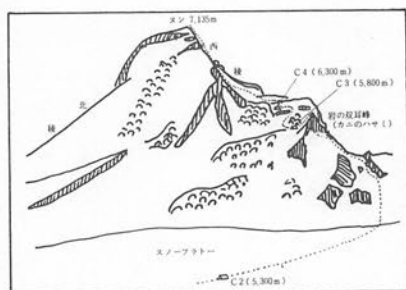
C 2 は昨日同様天気が良くない。西稜の取り付きまで行き、状態が良ければルート工作する予定でテントを出る。昨日のデポ地まで来るとガスで視界が利かなくなるが、大きな岩を目印に左ヘトラバースし、上部へ50m ロープ2本をフィックスし下山する。今日、食糧の荷上げがあればこのままC 2 に泊りルート工作を続けたいが、BCと連絡がとれないためC 1 へ下る。

木下、貝塚がC 1 への出発準備をしていると、バサンが寺沢の手紙を持って下りて来た。寺沢は昨夜から熱と下痢が続いているためC 2 の荷上げを中止し、C 1 で休んでいると書かれている。バサンとともに急いで上り（気持のうえだけ？）、貝塚は寺沢の様態を診て処置すると1時間ほどで熱が下がり始め快方に向かう。しばらくすると小泉、市川、カルマがC 1 に到着。一昨日以来交信が止絶えていたので一安心。

日没近くなって下山してきたスペイン隊の4人が立寄る。悪天候のため行動できず、食糧も日程もないことから登頂を断念したとのこと。22時頃まで交歓会が続いた。

ヌン、クンに逝った方々に黙禱

8月15日（曇り）



木下、貝塚、バサンはC2へ荷上げ。2人用テントのポールが折れているため補修する。C3へのルートを見るが、西稜だけがガスの中で一部分しか確認できない。

小泉、市川、寺沢、カルマはC1休養。マラさんもC1泊り。

夕方、マン、クン山群に逝ったHAJおよび旭川インド・ヒマラヤ隊の方々の冥福を祈り黙禱をささげる。

登頂への光、C3建設

8月16日（雪後晴後曇）

昨夜は満天の星だったのに起きてみると3～5cmの積雪があり驚く。C2入りの小泉、市川、カルマは荷上げの木下、貝塚と一緒にC1を出発。アイスフォールに陽が当たると雪面を照り返えし暑い。クレバスも日増しに大きくなり、飛び越えたつもりが後足がクレバスの端にひっかかりそうになったり、足を前に出すとズシン、ズシンと不気味な音を耳にするようになる。大きく迂回しなければならなくなったクレバスをのぞくと竹竿が見える。不思議なことに妙な安心感が出てくる。

木下、貝塚は荷を置いてC1に下る。

マラさんの付添いを兼ねて荷上げにBCに下

りた寺沢とバサンは、スペイン隊は下山し、別のスペイン隊が既にBCを建設。BCの周辺は緑が増し高山植物も咲いている。BC～C1間は雪が解け、また氷河上の川が大きくなり渡渉地点が限定されるため、最短のコースが取れなくなり前より時間がかかるようになった等の情報を持ってC1に戻る。

8月17日（晴後曇）

小泉、市川、カルマは14日のフィックス終了点から左上気味にルートを取りコルに出る（フィックス100m）。ガスの切れ間からキンシュトワール山群が見える。コルから上はガレ場、雪、氷のミックス帯で落石に注意しながら登る。部分的に氷面に凍りついて残置のフィックスロープを見つけ掘り起こしを試みるが、すぐに時間と労力の無駄と解る。ルートを5,700mまで伸ばしたところで雪がちらつき始め、時間切れとなる。今後の行動を考え、ミックス帯にもフィックスしC2に戻る。

木下、寺沢、貝塚、バサンはC1休養。

8月18日（晴後雪後晴）

小泉、市川、カルマは昨日に続きルート工作に向かう。昨日のフィックス終了点からカニのハサミ下の雪壁のルート工作に時間がかかる（200mフィックス）。雪壁を登りつめると岩壁に3本のハーケンでしっかりと支点ができており、古いロープが8本も固定されている。カニのハサミの基部を偵察し、30mフィックスして下降する。

木下、寺沢、貝塚、バサンはC2に荷上げ。水を作り、ノートにメッセージを書いてC1に戻る。

8月19日（晴）

市川は不調のためC1に下りることになり、止むなく小泉とカルマでC3建設に向かう。「今日こそC3を作らなくちゃ……」という焦りと、





確保の仕方等よく知らないカルマと初めてザイルを組むことに対する不安とで、重苦しい気持ちでカニのハサミに取付く。

60～70度の氷壁をダブルアックスで右端の岩稜寄りにルートを取り、150mのロープをフィックスし抜ける。核心部といわれるだけあって、なかなかいい傾斜をしている。慎重にユマーリングしながらカルマもゆっくり登ってくる。

切れ落ちる雪稜に上り、50mトラバース。ここにも残置ロープがあるが、古いものは引張ると切れてしまう。

カニのハサミ裏側の雪面を約100m下降した所をC3とする。念願のC3ができ、前途が明るくなる。久し振りに終日天気良好だ。

下降はバックステップで、アイスハンマーを打ち込みながらとなる。

C2泊りの木下、貝塚とC2荷上げの寺沢、バサンは一緒にC2へ。体調悪くC2に残った市川と合流し、5人でルート工作中的の2人を目で追うが、ガスのため見えたり隠れたりだ。カニのハサミの上に動くものを認めたとき、5人の表情は喜びで輝いた。

市川、寺沢、バサンはC1に下山。木下、貝塚はC3建設祝いにと赤飯を作りながら、小泉、カルマの帰幕を待つ。日没後の20時40分2人はC2に着いた。

C1ではスペイン隊の体調の悪い人（後日隊長とわかる）が休んでいた。かなりの重態で1人での行動は危険なので、夜になってからバサンが付添って下る。

8月20日（晴）

木下、貝塚はC3に荷上げ。朝の出発の遅れで時間的にきびしいのと、木下の体調が悪いためのカニのハサミの基部に荷上げ品をデポして下る。

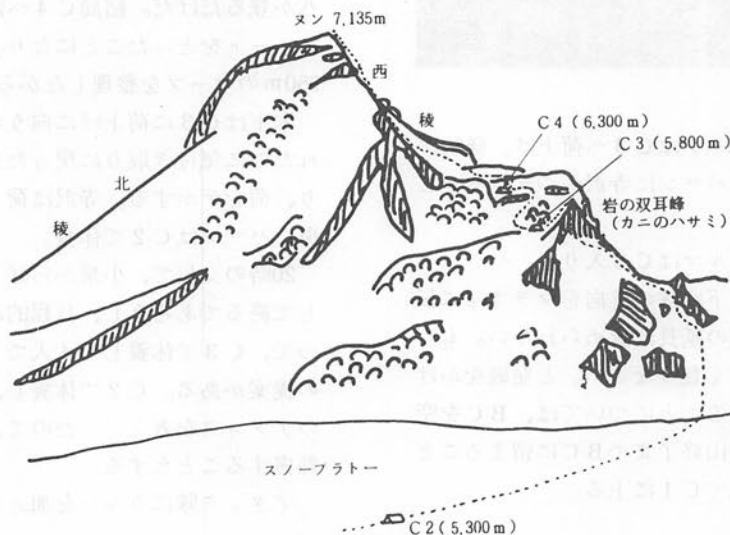
小泉、カルマは休養のためC1に下る。

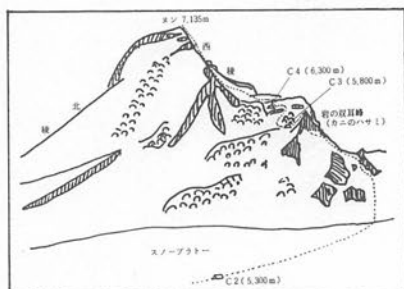
寺沢は荷上げと昨夜のスペイン隊員の様子をみるのを兼ねてBC往復。

市川はC1休養。

8月21日（晴後雪、みぞれ）

木下、貝塚はC3荷上げの予定であったが、木下のむくみがひどいため中止する。7時の定時交信で、全員C1に集合を伝えるが、交信後に貝塚が非常に体調が良いのでC1に下りずに





C2で休養して大丈夫だと言う。尻上りに体調が良くなっている貝塚の申し出を受けて木下1人が下る。

C1で今後の見通しについて検討する。C3ができ登頂の可能性が大きくなったが、日程的にきつい。計画ではC1で休養してアタックすることとしたが、C2休養でのアタックを考える。2～3日の登山期間の延長をマラさんに相談してみる。そしてC2に登りたがっているマラさんの扱いは、BCに下りる木下がC2まで付添って行動することを決める。

昼食後、寺沢とバサンはC2に、木下はBCに向う。

夕方から天気は崩れみぞれが降る。



8月22日(晴)

寺沢、貝塚、バサンはC3へ荷上げ。経験が浅く技術の未熟なバサンに寺沢がつきっきりとなる。

小泉、市川、カルマはC2入り。

BCに下りた木下は隊の意向をマラさんに伝えると、登山期間の延長は認められない。もう日数がないので早く登りなさい。と発破をかけられる。C2に登ることについては、BCを空に出来ないで登山終了までBCに留まることになり、木下1人でC1に上る。

8月23日(晴一時曇)

寺沢、バサンはC3へ荷上げ。C4建設には小泉、市川、カルマに体調の良い貝塚が加わることで4人はC3入り。

木下はC1からC2に上る。

懸垂氷河を縫ってC4

8月24日(晴)

早朝のC3からは北方に大きな山塊ナンガが、そして一見して雲と見間違いが、遙か西遠方にはカラコルムの山々が連らなって見える。改めてヒマラヤの一角にいることを実感する。

小泉、市川パーティが先行してルート工作し、貝塚、カルマが荷上げに続く。幾重ものハンキンググレッシャーを迂回しながら広いクレバス帯を左上し、雪壁を直上後、氷塊を巻くように右トラバースし、上部プラトーへの出口を求める。ヒドンクレバスを避け、崩れかかった氷壁に取付き恐る恐る抜けると、広い雪原が広がっていた。

ピラミダルな南西壁が真正面に迫る平らな雪面をC4とする。ここまですれば、あとは一か八か登るだけだ。結局C4へは大きく逆S字状にルートをとったことになり、フィックスした350mのロープを整理しながらC3に戻る。

木下はC3に荷上げに向うが、途中水筒を忘れたのに気づき取りに戻ったため時間切れとなり、荷をデポする。寺沢は荷上げのためC1往復。バサンはC2で休養。

20時の交信で、小泉から好天の周期はもう少しで終るであろうし、日程的にもう余裕がないので、C3で休養して4人でアタックしたいとの提案がある。C2で休養し、体調を判断してのアタックを考えていたので、各々が明朝まで熟慮することとする。

アタック隊にカルマを加えることについて、



アタックは隊員だけでも可能であるが、7,000mを越える高みでの高度835mを1日で登降することはかなりきついこと。そして万が一メンバーに事故が生じた場合、残されたメンバーでどれだけの処置がとれるかということを考え、また、カルマのこれまでの行動をみて、言葉こそうまく通じないが、数多くの遠征隊で培われた経験と勘の良さから、常に慎重で安心して行動を共にできると判断してメンバーに加えることにする。



8月25日(晴)

7時の定期交信で、C3の4人は今日C3で休養し明日C4に入る。そしてC4から上のルートを偵察し27日アタック。26日、27日の行動の際に体調の良否を冷静に判断することを決める。

木下は打合せと激励と荷上げを兼ねてバサンとともにC3に。市川はむくみがひかないために断腸の思いでアタックメンバーから降りることを自ら決断し、夕刻木下たちと共にC2に下りる。

この時点でアタックメンバーは小泉、貝塚、カルマの3人になる。

寺沢はC2で休養。

8月26日(晴)

小泉、貝塚、カルマはC4入り。午後から南西壁を偵察しロープを100mフィックス。

木下、市川、寺沢、バサンはC1に下りてテント撤収、梱包、ゴミ焼却をする。予想以上に時間を費し、真っ暗なスノープラトローをC2に戻る。

ア タ ッ ク

8月27日(晴)

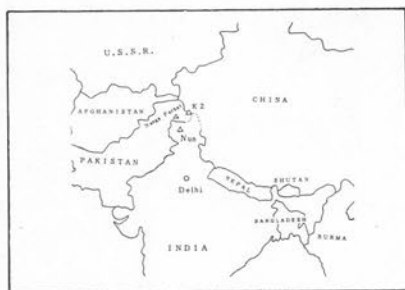
いよいよアタック。なのに1時間も寝坊し、5時40分出発。本日も晴天だが空の青さが薄らぎ、晴天域も終りに近づいているようだ。昨日のフィックス終了点からは3人でアンザイレンし、1983年のHAJ隊どおり迷うことなく西稜中間部に見える顕著な岩を目指し、慎重に足場を切りながら左上トラバース。ここ数日の好天続きで雪が解け、セラックはないが下の氷が露出し、却って危険な状態になっている。

8時10分、雪底を切り西稜に出ると広大なスノープラトローが一気に視界に飛び込んでくる。北斜面はまだ陽が当らず、風も強く寒い。頭上には真白い頂稜が紺碧の空を突き刺すように真っ直ぐに伸びている。ここで初めて「よし、やれる!」という確信が湧いてくる。

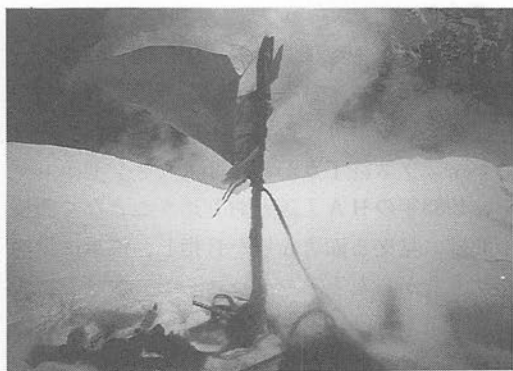
アンザイレンしたまま3人でトップを代わりながら登る。膝上のラッセルを覚悟していたが、予想外に雪は締っており助かる。だが、遅々として進まず、山頂は一向に近づいてこない。

左手に伸びる北西稜の狭い雪面に赤いテントが1張り見える。スペイン隊だ。中から2人出てきて私達が登っているのをずっと見ている。

途中、荒縄のような古いロープが50m位張っており、しかも小さな角材の切れ端を支点にしただけのものである。このあたりから更に傾斜が増し、下降を考えると頂稜全面にフィックスロープが欲しい。しばらく登ると左手にガラ場



が現われる。下から見るとこのガラ場を抜けた所が山頂だと思っていたが、雪稜は一段と狭まり、ラクダの背のような雪のコブが更に2つ続いている。一步一步新雪を踏みしめながら登っていくと、2つ目の雪のコブの上に何かしら見える。近づくごとにそれがボールだと確認できる。足元にボールが近づくと、その先はもう何もなかった。



12時25分、無事頂上に立つ。皆が待機しているC2に第一声を伝える。そして、皆の力なくして、決して頂上の3人はあり得ないんだということをひしひしとを感じる。3人で抱き合う。カルマも涙ぐんでいるようだ。

風もなく360度の展望だが、遠方から雲が湧き出ている。背後には黒々としたクンが間近に聳えている。スペイン隊のものと思われるトレースが頂上から北西稜へと延びていた。

1時間後に下降開始。スタックカットで慎重に下り、登りと同じ時間がかかってしまう。陽が沈み始める頃ようやく南西壁に入るが、全く気が抜けず持参したロープ100mをフィックスし、下降している間に暗くなる。最も恐れていた事態となる。ヘッドランプをつけ、終始バックステップで降り続け、20時過ぎ基部に降り立つ。

朝から飲まず食わずの体は緊張が抜けると途

端に“青菜に塩、となり、小泉と貝塚はどうしても真っ直ぐに歩かず、ヨレヨレになり20時40分テントに辿り着く。長い1日だった。



8月28日(晴後曇り)

アタック隊は昨日15時間行動しており、かなり疲労している様子なので寺沢、パサンがC3まで迎えに上る。

木下、市川はC2に残り、登頂仮祝の御馳走作りとゴミ焼却をする。

C2に7人が揃い、嬉し涙にむせぶ。天も私たちに味方してくれたようで、午後から灰色の雲が湧いてきた。

盛大に登頂祝い

8月29日(曇り)

C2を撤収し下山。C1には既にポーターが荷下ろしに上ってきている。ポーター頭に明日の予定のはずと伝えるが、ビスト氏から今日と指示されたという。26日にできなかった分を急いで梱包してポーターに渡し、テントを張ったあたりを念入りに掃除する。

BCでは登頂を祝しての飾りつけやお花が準備しており、ラクダの心遣いに胸があつくなる。1日早く北西稜から登頂したスペイン隊、私たちの次に西稜を登るスイス・オーストリア合同隊もお祝に来てくれた。



今日は寺沢の誕生日でもあり、2つのお祝いのためにラクバが料理に腕をふるうが、バースディケーキが一番見事だった。お祝いの宴が遅くまで続く。

8月30日(晴後曇り)

15時頃からポーター10人が荷を運ぶので、それに間に合うようにテント干しや梱包作業を進める。

スペイン隊が下山。

BC最後の日なので、市川の音頭のもとに隊員それぞれが得意の料理に腕を振る。

帰 路

8月31日(曇り)

テントを撤収し、掃除をして下山。タンゴールからはジープ1台にマラさんと隊員が乗ってホテル・ゾージラへ。ここで車の手配のため1日早くBCを発ったラクバと再会。ビスト氏たちもトラックで遅く着いた。

9月1日

夜中と言える3時20分に2台のジープで出発。1時間走った所で車待ちのため停車。カルマたちのトラックは3時にここに着き、また1時からここにいるという日本人旅行者もいた。15時30分ようやく出発。20時ハウスボートに着き、4週間ぶりにシャワーを浴びる。

9月2日

午前中カーペット工場を見、午後からデリーへと飛ぶ。1カ月ぶりのデリーは湿度が高く汗が流れ落ちる。

9月3日

H A J事務所に電話で下山の報告。午後からIMFに報告に行く。マラさんが先に来ており、一緒にカトチ氏に会う。マラさんから食料や装備の不備で登れなかったと苦情が出された。こ

ちらの事情やマラさんの登山技術の問題を説明するが、理解は得られないようだ。それでも最後に仲良く昼食をとって別れる。次に日本大使館に挨拶してYMCAホテルに戻る。

装備の一部を小包で送るため郵便局に行くが、箱の大きさ、重量ともに規定をオーバーしていると受け付けてくれないため梱包のしなおした。

9月4日

ヒンズー教行事のため会社、官公庁が休みでシカール社の精算ができない。

朝、ジャヤール氏が訪ねて来られ、私たち登頂を自分のことのように喜んで下さった。加えて、ルビーの手持ちのない私達に貸して下さり、ただただ感謝するばかりだ。

9月5日

シカール社の精算を済ませてから、ジャヤール氏の昼食の招待があり出かける。夫人も同席され楽しい一時を過ごす。

木下、小泉、市川は寺沢、貝塚、シカール社員に見送られニューデリー空港を発つ。

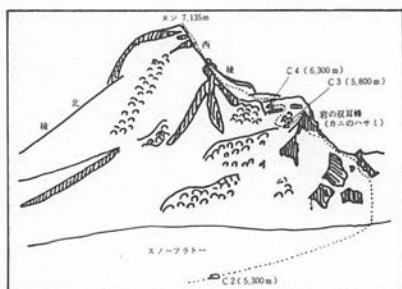
寺沢、貝塚は帰国する3人を見送った後、デボする装備の整理をする。

9月6日

木下、小泉、市川は成田空港に到着。小泉のご主人が、「登頂おめでとう」の横断幕とバラを手に出迎えてくれた。

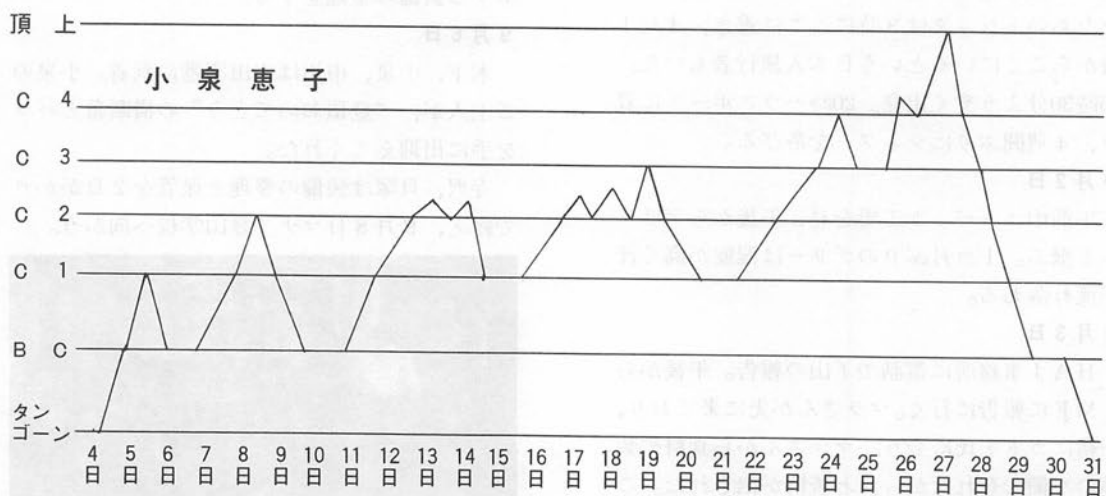
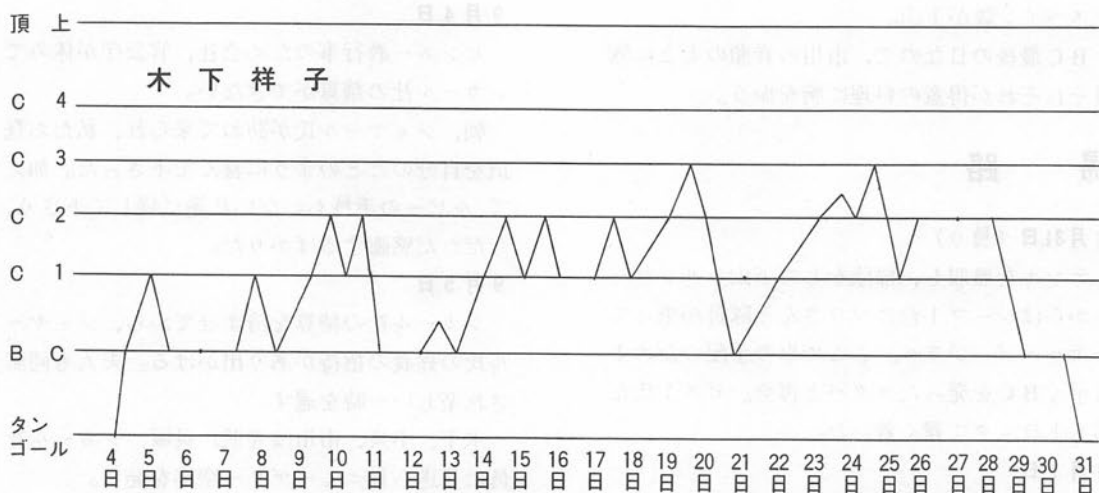
寺沢、貝塚は装備の整理と保管を2日がかかりで終え、9月8日マナリ登山学校へ向かう。



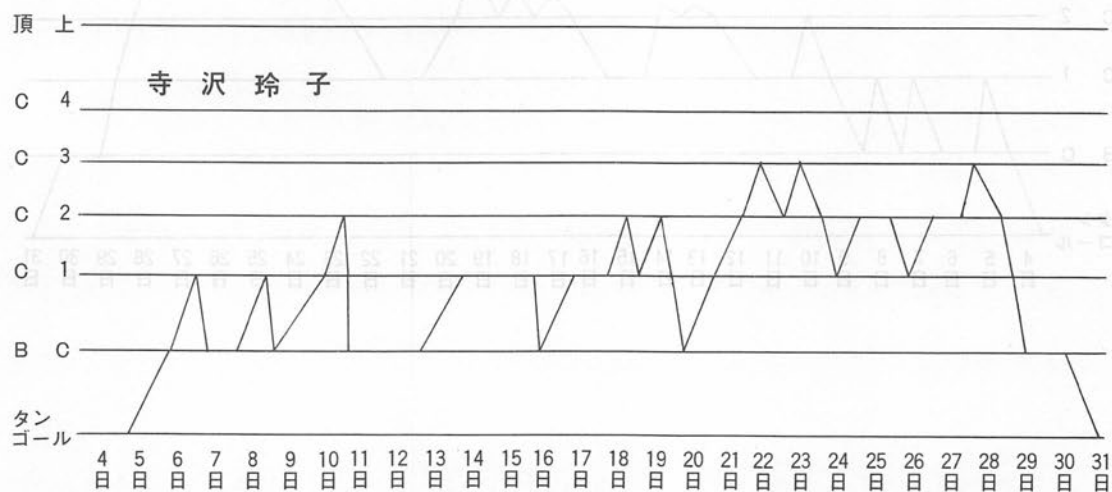
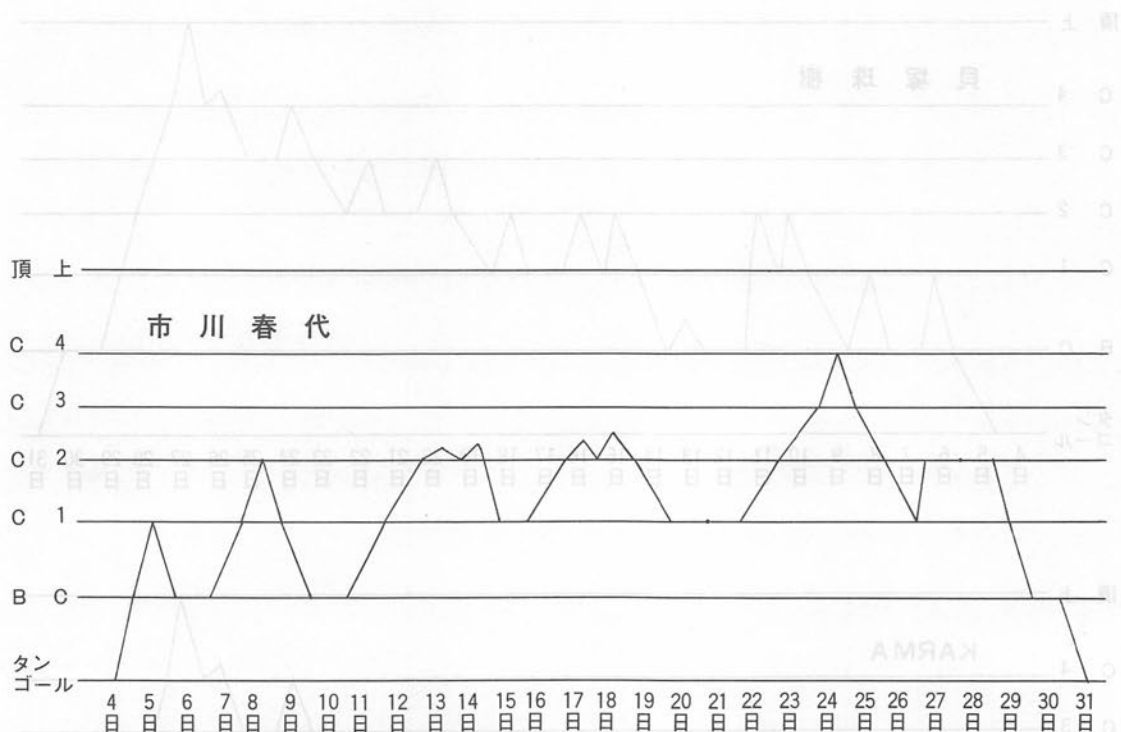


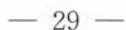
到達高度に

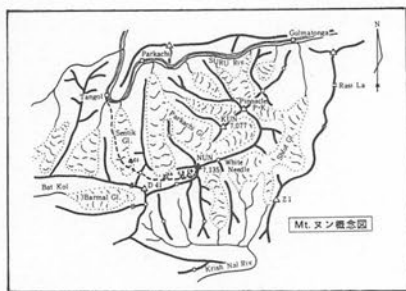
B C	4,100M
C 1	4,900M
C 2	5,300M
C 3	5,900M
C 4	6,300M
頂上	7,135M



よる個人別行動表







登山をおえて

「7,000mに！」の夢は隊員2人と高所ポーター1人が登頂し実現することができた。これは、国内の準備から始まり、インドでの渉外その他の用務、登山活動に入ってからルート工作に荷上に懸命に働いたからであり、また心配した高所の影響は軽重の差はあるが全員が受け行動出来ない日もあったが、他の人の手助けを要することなく1人で行動でき、全体に及ぼす影響が少なく済んだのが幸いした。加えて高所ポーターの雇用、天候がうまく味方してくれたことも要因であろう。

登頂に成功し、今後もヒマラヤ登山を計画したいので問題点を整理しておきたい。

その前にまず、1985年日中婦人友好登山隊で崑崙山脈を取り組んだメンバーのなかで、7,000m峰の夢が芽生えていることを知ったH A J理事の稲田定重氏と阿部淳氏は、常に助言と激励を寄せてくださった。このことは、居住地が離れ日頃顔を合わせる機会のない私たちが、夢をしばませることなく持続できた要因であったと思う。1986年に具体的な活動に入ってから、準直轄隊にもかかわらず、H A J事務局の尾形好雄氏と阿部淳氏をはじめ北海道H A Jの役員の方々が、全面的に協力してくださり準備を進めることができた。H A Jの方々の適切なアドバイスと手助けがあったからこそ今回の計画を実現させることが出来、心から感謝いたします。

1 渉外について

インドでの渉外担当であった隊長の手違いでミスを生じた。1986年H A J女子隊長を務め、インドでの渉外に詳しい寺沢隊員の尽力で大事にいたることなくクリアできた。またH A Jの名の下に助けられたケースもあったと思われる。渉外に関するミスは、隊の致命傷になりかねないことを担当者は十分認識しておかなければならない。

2 ミーティングについて

隊員の居住地が分散しているため一同に会してのミーティングが1回しか持てず手紙や電話で連絡を取り合った。全員ヒマラヤ登山を経験しているため比較的スムーズにいったが、確認の取り方に曖昧な点があり理解のしかたに食い違いがあったので文書で十分に確認の必要がある。

又手紙や電話でのやり取りだけでは、議論の中から生まれるプラスαのものが得られない弱点がある。今後広域の隊の場合この点の工夫が必要であろう。

3 登山活動について

計画では、ルート工作と荷上げを交代で行う予定であった。B C入りの初期、体調や高所順応の具合に差があることからルート工作と荷上げのメンバーが固定した。登山期間が決められているためできるだけ早くルートを伸ばさなければならず交代できなかったのはやむをえない。またルート工作は隊員だけで行う予定であったが、やはり体調や高所順応の関係からルート工作班と一緒に荷上げできる体制が整わず、カルマをルート工作班に任せ、必要な荷上げを同時に行った。

C Iで休養してアタックの予定であったが、途中悪天候のためルートが伸びず登山期間が残り少なくなったためC 3休養でアタックした。「0mで決めたことを基本的には変えてはならない」このことを念頭にいれながら考慮し、これまでの行動、そして体調から判断してC 3からのアタックを敢行した。その場の雰囲気や変更するのは危険であるが、0mで決めたことを全員が冷静に考えられる場合はケースバイケースで対応していきたい。

報告 業務 擔



各担当報告

渉

外

小 泉 恵 子
寺 沢 玲 子

国内

87年夏は、希望するインドの7,000m峰はどれもすでに予約済みとのこと。ことに人気の高いヌン、クン、サトバントなどは、時期にもよるが、1年前からでは遅いようだ。参加できるメンバーの休暇の関係から、「それでも87年に！」ということで、ガンコトリエリアを中心とする6,000m級の山の選定をしていた矢先の86年暮れ、インドのシカル社社のクマール氏（社長）に会う機会を得、彼の尽力によって、ヌン西稜の許可の内諾をとることができた。このことで、渉外を含む登山計画が大きく前進し、早速、登山申請手続きへと作業が進められた。

休暇の関係で、登山日数に余裕がないことから、インドでは積極的にエージェントを利用する方針で、宿泊や輸送、ポーターアレンジだけでなく、通関やトランシーバー使用許可取得等に関する諸手続業務一切を依頼し、その見積りのために再三、エージェントと手紙のやりとりを交わした。3月に参加が決定した寺沢隊員には、以後のIMFやシカル社宛の英文作成や和訳等に当たってもらった。

ヌン遠征が決まった時点で、HAJに対し今回の私達の隊を、HAJの遠征隊としていただきたい旨の依頼をしたところ、快く引き受けていただくことができ、渉外だけでなく、梱包や輸送その他諸々の業務を、事務局の尾形氏が全面的な窓口となってやって下さり、数々のアドバイスもいただくことができた。

尚、国内の連絡は、緊急性を除いては、HAJ ↔ 東京 ↔ 札幌のルートで取り合ったが内

容によっては、連絡不足な面もあった。

（小泉恵子）

国 外

幸運な事に今回遠征活動が渉外的な問題で滞った事は一度もなく、その意味では良かったのだが、“一歩手前”という事は多々あった。

今後の参考までに比較的起こしやすそうな事例を、数例掲げておきたい。

- 1 書類にサインする時には、必ず内容を確認する。サインは日本の印鑑と同じ、いやそれ以上に効力を持っているという事を念頭におく、相手の押しに負けてついうっかり、なんてことになるとう痛い目を見ることもある。
- 2 トランシーバー等持ち込み禁制品のTBREに関しては、気を使って欲しい。係官が億劫がって見なかったフリをしてくれる、と言ってもその手に乗って出国時に苦勞するのは自分達なのだから。
- 3 契約変更等の場合、こちら側で内容訂正や金額訂正は書き込まず、必ず相手に書き直してもらい、トラブルが生じた時、不利である。
- 4 パスポートのサインは、漢字であろうがひらがなであろうが、はたまたニックネームであろうがかまわない（1987. 7. 26現在）。しかし問題は公式な書面にサインする場合である。今回、荷受人のサインが漢字だったために、本人は漢字、ブロック体、筆記体の3種類のサインをしていたが、その度に説明を問われ、少々わずらわしかった。これは個人の好みであるからさしたる問題ではないが、自分で説明が出来るのでない限り、特に時間



の制約のある遠征などの場合、止めた方が良いでしょうに思えた。

5 今回は全員が海外経験者という恵まれた隊である。しかしそれが逆に固定観念を生み、渉外的にやりにくい事が多々あった。いつもこうしているから、とか、こういう方式で今までやってきたから、とかという声を度々耳にしたが、何時でも何処でもそれが通用する

とは限らないということを考えて欲しい。もう少し臨機応変に考える余裕があったら、もう少しゆったりした気持ちで遠征も楽しめるし、渉外活動も楽になると思う。

最後に、直轄隊ではないとはいえ、全面的に窓口となって下さったH A J事務局の尾形氏に深く感謝したい。

寺沢 玲子

装

備

寺沢 玲子

当初、H A Jのデポ品を全て使用可能であるという話から、一転してリモI峰隊と同一時期のため、主なる装備は期待出来ないという状況であったが、輸送直前に、リモ隊は延期となり、全装備を使用出来ることとなり、幸運であった。この事により持ち出し品は大幅に減り、更に必要装備のかなりの部分を寄贈並びに借用品で補えたため、予算内で達成出来た。しかしながら、高温多湿の倉庫内にデポされている装備の消耗度は、前年入念なチェックをしていたにもかかわらずひどく、今後はデポの対策を考え直した方が良いかもしれない。また、ネズミによる被害もあった。

個人装備に関しては、日本国内の冬山を想定し、特別な用意はしなかったが、充分事足りたと思う。ただし、高所ポーターのピッケル、アイゼンの破損が相次ぎ、持参した予備品や連絡官への支給品まで借用する羽目となった。今後は高所ポーター用装備も隊員と同様に考えた方が、無用なトラブルに悩むことがない分、楽であろう。

使用固定ロープ関係量は以下の通りである。

固定ロープ1,450m（下部300mはスペイン隊

の残置が利用できたため）。・アイスピトン11

・ロックピトン1 ・スノーバー24

破損装備は以下の通りである。

・ピッケル1（高所ポーター所有の木製シャフト） ・アイゼン2（高所ポーター所有）

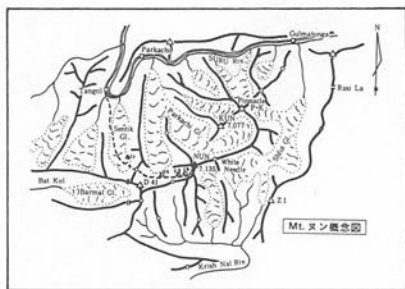
・エスパース4～5人用ポール1（消耗） ・エスパース1～2人用ポール2（不良品の可能性あり） ・ダンロップ5～6人用テント1

（消耗） ・エスパース4～5人テント1（消耗） ・トランシーバー1（どこかでぶつけた様子） ・最高最低温度計1 ・ランタンホヤ1

今回、プラスチックブーツ3名、ワンタッチアイゼン3名と、近代的装備が多かったが、使用感はどうであっただろうか。個人的には靴はメンテナンスの面倒がなく、またワンタッチアイゼンはバンドによる締めつけがない上着脱の楽さが利点と思えるが、如何なものであろうか。

全般的に見て、とりたてて良かった点もなかったかわりに、悪かった点もなかったように思う。

最後に、数々のアドバイスや御協力をいただいた、リモI峰隊の斎藤安平氏に深く感謝したい。（斎藤安平氏は、1987年12月20日、冬季ア



ンナブルナ I 峰南壁イギリスルートから無酸素
初登頂後転落し、行方不明となりました。慎ん

で御冥福を御祈り致します。)

食

糧

市川 春代

計画、立案にあたっては'85 H A J 日中婦人
友好登山隊、各インド・ヒマラヤ登山隊の資料
を参考にし、費用の関係でできる限り現地調達
とすることにした。

〈国内調達分〉

企業への寄贈依頼、H A J 会員の勤務先から
安く購入するなど予算内で収めるようにした。

〈現地調達分〉

米、小麦、行動食用のビスケット類はデリー、
野菜・果物類はスリナガールで購入。インド米
はパサついているが、佃煮やふりかけがあれば
食べることができ問題はなかった。野菜類が不
足し、タンゴールへ降りても購入できないこと
があった。(気候の関係で作物が不作だったよ
うである。確かかどうか解りませんが)

行動食とともに4人分1バックとしてレーシ
ョン化した。量的には十分であったが、たんぱ
く質、カルシウムが不足気味であった。佃煮、
煮豆類は食が進み好評であった。また行動食と
しては、チーズ、カロリーメイト、かんぱん、
干魚、サラミ、コンデンスミルク(チューブ)
などが好まれた。

〈反省〉

輸送した食糧のなかで全く使用しないものが
あったので国内での調達時に現地調達との関係
を考慮すべきであった。(野菜と一緒に調達す
るもの) α 米、ライスフレックなどの残量は、
マナリ登山学校へ寄贈するなど有効に活用し
た。

輸送・梱包

小泉 恵子

梱包資材は、従来のプラパールBOX (L・
Mサイズの2種類)を使用した。ベースキャン
プまでのキャラバンが1日と、全体に荷の積み
おろし回数が少なかったことから、梱包資材の
破損等に関して、あまり心配はしなかった。梱
包作業は、東京と札幌の二手に分かれて行い、
一括して業者に引き渡した。

また、デリーに保管されているH A J デボ品
(装備類)を使用することができたため、国内

からの輸送量は500kgと少なく、国内での梱包
作業と輸送費は軽減されたが、その分、デリー
でのデボ品の点検と梱包作業に時間がかかっ
た。

輸送については、当初、アナカン扱いを予定
していたが、その後、費用の関係から、H A J
別隊との共同輸送でSea&Air扱いに変更とな
り、予定を早めて梱包に入った。ところが、業
務の手違いで、突然、引渡し日が繰り上がり、



急遽、パッキングリストを作らなければならないという事態になり、尾形氏と寺沢隊員は、事務所に缶詰めとなり、作業にあたって下さったおかげで、急場を切り抜けることができた。

インドでの隊荷輸送は

往 デリー→by Air 2h→スリナガル→チャーターバス 2 日→タンゴール→ポーター 1 日→B. C

復 デリ←トラック 4 日←B. C

であったが、タンゴールへ延びる道は軍用道路であるが、片側一方通行のため、スリナガル～タンゴール間の軍用基地では、往復とも、たっぶり半日待たされ、予定が狂った。

登山終了後の隊荷のほとんど（装備類）は、整理して再びデポし、各自の個装のほとんどは、出国前に郵便小包に梱包し、日本に発送（船便のため、12月末に到着した）したため通関手続はなく、残りはすべて手荷物物品として持ち帰ることができた。

〈反省と問題点〉

札幌梱包の際、最も気を使うはずのEPIガスカートリッジを入れたカートンを一部チェックしないまま梱包してしまいどのBOXにガスカートリッジが入っているのかわからない状態になってしまった。通関で、もしガスが入っているBOXを開けられたら万事休すである。特に指示しないで手伝いの人に任せたことが大きなミスにつながった。実際に通関手続きをする者が、責任をもって、手続き内容を熟知しておくべきである。

輸送では、業者のミスとはいえ、突然の業者引渡しと、パッキングリスト作成は、担当者としては、急に仕事を休むこともできず、不可抗力であった。

このことに限らず、大きな力になって下さった尾形氏と、梱包・輸送・渉外という隊務が十分消化できなかった部分を、快く補ってくれた寺沢隊員に心から感謝したい。

医

療

貝塚 珠樹

国内準備

今回は遠征経験者による隊であったため、高度障害に関する基本的な知識はむろん、過去の経験から起こり易い症状についても個々の意識づけがなされていたので、出発前には高度順応のためのチェックポイントについて確認し合うのみとなった。

しかし、高度順応とはひと口に言っても現地生活での順応、体調、タクティクス等というさまざまな要素が関わっているわけで、結局は隊員個人が自己の体調を冷静に把握していく必要があり、そのためにも日課として体調チェック

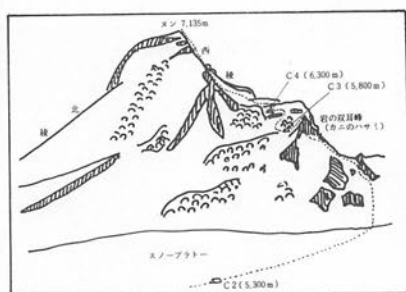
カード記入を取り入れ、各キャンプに用意した薬品には症状に対応できる様に使用方法を記入したマニュアルを用意し、自己管理に重点を置いた。

予防接種はコレラ、肝炎は義務づけ、できれば破傷風、そして出発近くの情報から日本脳炎が流患しているということから、できる範囲で日本脳炎も受けるようにした。

また、隊員2名に貧血の治療を受けている者がいたが、出発前には正常範囲に留まった。

現地医療

1 デリー～タンゴール



国内での準備に追われ、慌しく日本を立ち去り、暑さの中、買い出しや渉外等にとびまわり、あらゆる環境の変化の中で、各自バテ気味ではあったが、これといった支障もなく経過。水からくるとされる下痢には対症的に、止痢剤、整腸剤、抗生物質の内服により軽減した。

2 タンゴール～BC

車で一気に最終村のタンゴール(3,500m)まで入るため、3,000mラインでの順応を考慮し、BCあたりまでアルダクトンAを各自持参し、様子を見て内服してもらった。効果は個人差があるが、排尿減少する者はいなかった。タンゴール村からBCまで順応を目的に往復するが、貝塚は行動中嘔吐、脈拍も140まで上昇。翌日は、熱の上がった寺沢と共にタンゴール村で順応を図る。結局、1日遅れでBC入りとなるが、その後は順調に復調する。

3 BC～登山活動中

重篤な高度障害に陥るケースはなかったものの、市川は頭痛、浮腫に悩まされ、薬を飲み続け、コンディションとしては今一つであったが気力で頑張った。頭痛にはセデスが効力を発揮した。また木下隊長も全身浮腫と乾性咳嗽、等に悩まされ、鎮咳剤、利尿剤を使用した。症状の発現、治療が遅れたせいか、キャンプを下げてても著明な改善はみられなかった。BC入りを遅らせ、その後順調な活動をしていた寺沢も、CI入りした晩に再度発熱、39.6度まで上昇、嘔吐、下痢をくり返し、脱水症状となる。連絡を受け、CI入りした時点では胃腸症状は軽減しており、ボルタレンSPにて熱は36度まで下降。苦しい一晩ですっかり気弱になっていたが、その後大きな変調はみられない。小泉、貝塚はBC以後特

にトラブルなく、6,000mラインでも頭痛等、これといった症状はみられなかった。アタック前夜はカレーを2杯食べ、寝坊する程、食欲、睡眠共良好であった。

おわりに

単に医療とはいっても、状況に合わせた判断が必要とされる中、タクティクスと密接な関係にある。健康管理の難かしさには、限られた人数のローテーションの中、故障者が出ればそれだけ個々への負担、隊の進行にも影響が出る。"もう少しがんばれるのでは、"とついつい無理をしてしまう。そんな状況の中でいかに冷静で適格に判断を下すかが大きなポイントになるが、無線だけで状況を把握するには限界がある。パートナー同志、常にお互いにチェックし合える姿勢が何よりも大事であると考えている。

体調チェックカードに関して

過去の報告書の反省、"登山活動中はチェックリストの記入が行われづらい、"という点が上っており、いかに書き易く、役に立つものであるか、という点に着眼し、大きさをコンパクトにし、内容も簡潔に、点数式としてまとめた。その結果、各隊員詳細に記入されており、"記入し易かった、"というコメントを得たが、何よりも、各隊員の体調への意識の高さは、評価したい。

生理について

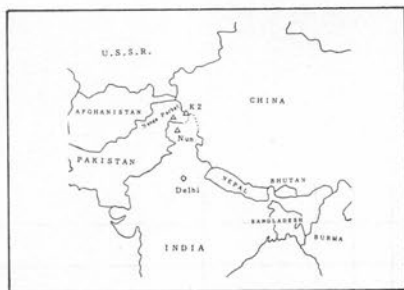
高度に対して生理機能がどう変化するか、興味深い点はあるが、遅れた者、延長する者、ほとんど変化のない者等、個々さまざまであった。いずれにせよ、登攀活動に支障となるケースはなかった。

酸素について

BCにはO₂ボンベ(シカル社からレンタル)を用意。各キャンプにはO₂キャンドルを各4本上げたが、アタック後就眠時に1回使用したのみだった。

'87ヌン女子隊 体調チェック表

ate	7/29	30	31	8/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
位 置																																	
前日の動																																	
脈 拍																																	
体 温																																	
頭 痛											+																						
倦怠感											±																						
咳																																	
咽頭痛																																	
喘息																																	
呼吸苦																																	
嘔気																																	
下痢																																	
食欲不振																																	
不眠																																	
2点浮腫																																	
2点嘔気																																	
評 価																																	
そ の 他																																	
処 置																																	



＜注射薬＞					
抗生物質	シオマリン	8V	止痢剤	バイオフェルミン	1ビン
	セファメジン	4V	下痢	アローゼン	40P
	パンスホリン	4V	制吐剤	プリンペラン	50T
	トブラミン (60mg)	10A	胃腸薬	ブスコパン	100T
止血剤	アドナ	3A		武田胃腸薬	100T
	トランサミンS	3A	総合感冒	PL顆粒	80P
利尿剤	ラシックス (20	8A	ビタミン剤	ボボンS	250T
解熱剤	メチロン (25%)	2A	末梢循環改善	ユベラ	40T
救急薬品	メイロン (7%)	8A	催眠剤	ハルシオン	40T
	エホチール	5A	抗アブリア剤	ダラプリム	50T
	2%キシロカイン (100mg)	1A	補液	ルルトマン (500ml)	6
	ボスミン (0.5mg)	3A		ヘスパンダー (500ml)	502
鎮痛剤	レペタン	3A		グリセオール (300l)	2
尿麻剤	1%キシロカイン (20ml)	2V		マニトールS (300ml)	1
含嗽剤	イリジンガーグル	2		生食 (100l)	2
ステロイド剤	ソルメドロール (500mg)	2	消毒	70%アルコール (50ml)	1
				イリジン	1
＜内服剤＞			軟膏	リンデロンVG	3
抗生物質	ケフラルール	220T		ユベラE	9
	ミノマイシン			硼酸亜鉛華軟膏	600g
利尿剤	ラシックス (40mg)	40T		パラマイシン軟膏	150g
	アルダクトンA	50T		デキサルチン	3本
鎮痛解熱	セデスG	150P	坐薬	ボルタレンSP (50mg)	20本
	ボルタレン (50mg)	20T		シエリブロクト	15本
鎮咳剤	アスベリン	80T	点眼剤	フラビタン点眼	8本
止痢剤	ロベミン	60P	外用	ヘルベックス	3P
	エンテロノンR	10P		モルホット	2P

＜医療材料＞

ペアン	5	メスホルダー	1	オルテックス	2	ガーゼ	50
鋏子	1	メス刃 No.10・No.11	各2	エラスチコン	5	検尿テープ	1
クーパー	1	ナイロン糸	5	ステリーテープ	3	サビオ	80枚
持針器	1	絹糸	2	バルンカテ	2	輸液セット	15
血圧計	1	ゴム手袋	3	オキツセルコットン	1	注射針	20
ステート	1	レジフレックス	3	絲球	15	注射器	30



会計

木下 祥子

収入の部

参加費	3,500,000円
寄付金他	102,012
計	3,602,012

支出の部

(国内)

登山料	234,550円
事務費	152,860
航空券代	914,000
装備費	156,325
食料費	108,999
梱包費	19,625
輸送費	266,192
医療費	37,930
記録費	10,750

会議費	100,570
シカール社支払	445,600
小計	2,457,401

(国外)

シカール社支払	581,504円
滞在費	78,256
事務費	51,373
輸送費	11,376
装備費	5,436
食糧費	18,840
雑費	5,700
小計	752,449
合計	3,209,850
差引残高	392,850

説明

収入の部

参加費 1人70万円
寄付金他 餞別、日中婦人友好登山隊報告書の残金、不要品の販売。

支出の部

シカール社支払 インドにおけるすべての業務を契約。半額は契約後に日本から送金。

(国内)

登山料 登山規則に定められておりメンは1,500US\$
事務費 事務費、通信に要した費用、交通費、土産、謝礼、保険料等。
航空券代 成田～ニューデリー、北海道在住者の国内線の航空券は個人負担。

輸送費 別送品はSea&Airで輸送、東京～シンガポールは船、シンガポール～ニューデリーは飛行機。通関料、札幌～東京の送料を含む。

医療費 酸素（Oバック）と寄贈を受けなかった薬品を購入。

会議費 反省会に要した費用、出発前の会議の費用はそのつど負担。

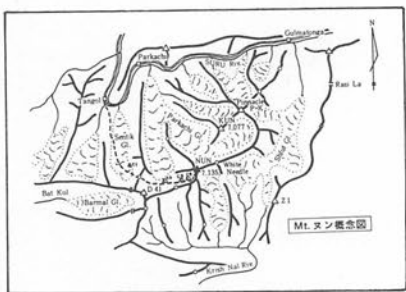
(国外)

滞在費 登山活動期間を除く食費等。

事務費 電話、礼状、土産、謝礼等。

輸送費 借用した装備の送料（郵便小包）。

雑費 リエンオフィサーのホテル代等
残金は、報告書、残務整理の費用に当てる。



記 録

貝 塚 珠 樹

隊の記録用カメラとしては、上部用に1台用意、あとは自由とし、隊員各自、1眼レフと全自動カメラを併用した。

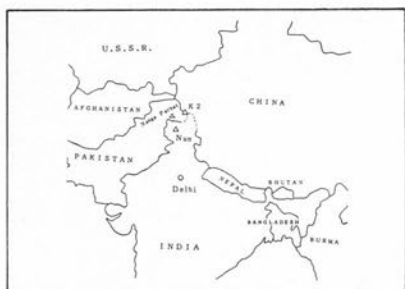
当初の予定では、全自動カメラでは凍結等によってシャッターが下りない危険性もありうるためアタック時にはオリンパスOM-1を用意していたのだが、実際場面で、カメラの荷上げに支障をきたし、結局、個人の全自動カメラ2台での撮影となった。幸い、シャッタートラブルはなく、撮影はできたが、1台は中で汗をかいてしまい、でき上がり画像はぼかし入りの作品となってしまった。

できれば8ミリカメラも用意していきかっただが、準備段階で手に入らず、また、活動中隊員にそれだけの余裕があるか検討の結果、諦めざるをえなかった。結果として、限られた人数

の中行動中にカメラを回すのは、かなりの負担と考えられ、正解だったのかもしれないが、動く映像が記録として残っているならば、これ程理想的なものはないと思う。

カセットレコーダーについては、アタック交信の模様をとるために荷上げすることになっていたのだが、手違いから、失敗に終わってしまい、もっぱら、音楽用に使用した。

また、各隊員同志のコンタクト手段の一つとして各キャンプに設けた連絡ノートについては、無線交信で得られなかったような情報や、個々の状況、コミュニケーションの一端として有効だった。またノートの中には出発前に書いて頂いた、励ましのコメントがあり、画一的なテント生活の中、楽しく読むことができ、好評だった。



夢を語る

再びのインド、そしてヌンで感じたこと

小 泉 恵 子

思えば、慌だしい旅だった。山登りのためにだけ訪れ、広大なインドのほんの一部をセカセカと通り過ぎてしまったような思いが残っている。

初めてインドを訪れたのは、78年H A J ヒマラヤ登山学校での遠征の時だった。隊が解散した後、メンバーであった今は亡き角田氏と共にインドを旅した。

生身で生きる術をもち合わせ、生きることに必死な、ギラギラしたものを、人々の中に感じた。"生き馬の目を抜く"まさにそうした生き様を見せつけられた思いと同時に、インドで生きる厳しさを感じた。こんなことを言うと、インドの人に対して失礼なことなのかもしれないが、だから、そんなインドの人々の姿が鮮烈に焼きつき、登山とは無関係に、インドという国が、何かしら肌の馴じむ魅力ある、機会があれば、是非また訪れたい国として、深く印象に残った。

85年の崑崙での夢が、切れずに皆の手ではぐくまれ、再びインドの山に出かけるという現実になで育てることができた。9年ぶりのインドとなったが、やはり変わっていた。デリー市内には、以前にはなかった近代的なビルやハンバーガーショップやその類の店が建ち並び、休日のランチをそうした店で食べ、街中を、アイスクリームをナメナメ歩くのが、やはり都会人的流行となっているらしい。以前には見られなかった光景だ。でも、そんな光景を前にして、「インド、おまえもか〜!」とは決して言えないだろう。そしてまた、そんな風にしてのんび

り歩く人々の表情にも、以前には感じられなかった和やかさというか、ゆとりのようなものも感じとれた。それは、ほんのわずかの人々でしかないのかもしれないし、それを見る私自身の変化がそのまま反映しているだけなのかもしれない。そんなことを思いながら、ソナマルグでの長い待ち時間を費した。

今回のヌンは、正直なところ、私達には大きすぎる山だった。希望していた以上の山の許可がとれてしまい、「よかった!」というより「大変だあ」という気持ちだった。「どうせ断わられることがわかり切っているのに、無真矢理、プロポーズをしにいくようなものだが、せっかくのチャンス。とにかくできるところまでやってみよう」という気持ちで日本を発った。

5,300mの広大なスノープラトーンに上がり、初めて真近かにヌンを見た時は、その美しさと同時に、急峻な西稜に、絶望的な恐怖感を覚え、鳥肌の立つ思いだった。でも、そんなルートにも、全員がアリのように懸命に働き、アリ道を開き、巣を作ることもできた。

C3では、それまで終始行動を共にしてきた市川が、アタックを前に、自ら下りていった時は、涙が止まらず、どうしようもなかった。

人間だから、時には感情の軋轢もあったが、ここまで育ててきたものを大切にしたいという皆の想いが、チームワークを支えた。そんな私達の様子を、角田さんはきっと、天国から暖かく見守り、導いてくれたに違いない。

全員が病気や怪我もなく、無事帰国できたことが何よりのお土産だ。反省会では、「行って



よかった」「また行きたいね」と語り合っている。そうした言葉が出て初めてほんとうの成功といえるだろう。

山頂の雪の中に、2枚の写真を埋めた。1枚は、学園の子供達。もう1枚は、夫である。今の私にとって、この2つの存在が不可欠なものとなっている。私にとっての“山”とはこの両者に支えられて成立しているのかもしれない。どちらかが欠けても、きっと私の中の“山”は崩れるのだろう。でも、これまでのように、仕事と遠征を両立することはできない立場になった。かといって、簡単に仕事を捨てる気はない。いずれにしても、大きな選択を迫られる時期が来るのかもしれない。

「真のロマンチストは、真にリアリストでもある」という言葉があるが、真のロマンチスト

になることはなかなか難しいことだと思う。でも、崑崙で生まれた親亀の上に、インドで子亀が乗った。共に行こうとする仲間がいる限り、いつか、孫亀も乗せたいものだ。

ヌンはほんとうにきれいな山だった。また、あのような美しい山に出かけてみたい。

通称“オバハンチーム”(約1名を除く)の、たった5人の小さな力では到底成し得ることのできなかった今回の登山に、全面的に協力して下さったH A Jの方々をはじめ、各隊員の家族、職場の上司や同僚達、そして多数の友人・知人の方々に対し、心からお礼と感謝を申し上げます。

そして最後に、何よりも、陰になり陽になり、無言で支えてくれた夫に対し、深く感謝したいと思う。

あの日、そして

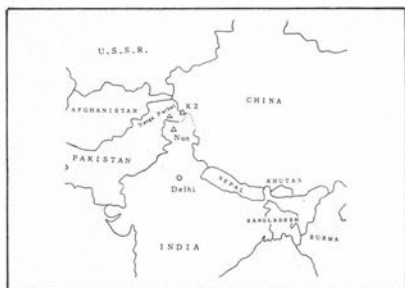
市川春代

○月△日 登頂した隊員を迎え入れ、女5人が体を寄せひたすら眠ったC2とC1を撤収しBCへと下る。念願の登頂と全員でBCに戻れるという安堵感に皆の重い荷が手伝って、少し歩いては休む、たっぷり休んでは歩くをくり返しBCに着く頃は夕暮れになっていた。休んだ時の会話はとりとめもなく細いことだが、それぞれのことばにおだやかさがあり、夕焼けを背に語り合う隊員達はいい顔をしていた。

BCの手前に来るとC1で会ったスイス・オーストリア合同隊の2人が手を振ってくれる。彼等に会うまでは「エーッ! 青い目の青年! ?」とひそかに期待していた隊員もいたのだが、彼等は私達より年上のヨーロッパアルプスを登っ

てきた青年だった。彼等に手を振って応じ空腹を満すべくBCへ急ぐと、BCの入口に白いものがクルクルと回り、大きな岩と岩の間には1本のロープが張られいろいろなものがくくりつけられている。近づいてみるとクルクル回っているのはブラパールとストックで作った風車で、ロープにくくりつけられていたのは赤の標識布やBCに咲きほこっている花、木の枝、ホットケーキミックスなどの空箱であった。

それ以上に私達を驚かせたのは、北西稜からの登頂に成功したスペイン隊とBCに残っていたマラ連絡官達が1列に並び私達を拍手で迎え祝福してくれたことだった。このあたたかなセレモニーの装飾はキッチンボーイのラクバが作



ったもので彼の故郷ネパールで祭りや祝いごとがある時に飾られるものらしい。ラクバが用意した夕食は野菜と酒(?)に飢えていた私達を十分に満足させ、さらにテラさんの感激を誘った。パースディケーキができたのだ。この日はテラさんの誕生日だった。大きく焼いたスポンジにジャムをぬり、そのまわりをBCに咲いている色とりどりの可憐な花で飾ったケーキはショーウィンドーに並んでいるそれよりも豪華で素敵だった。彼は私達が日本から持って来たホイップクリームで“HAPPY BIRTHDAY”を描くことも忘れていなかった。

夜、久しぶりに土の上で寝る安心感からかそれとも酒とシエルパダンスに酔いすぎたせいか登攀具の上で眠っているユメをみ、おまけに何を勘違いしたのか隣りのつるさんの胸に手が伸びたらし「なあに?」の声で目を覚めた。

私達の祭りは、BC撤収の日、ネパールの空へ、インドの土へ還った。

□月×日 デリーに残ったテラさんとタマチ

ちゃんと別れてから十数時間後、成田に着く。数日前、つるさんと「日本に帰った時に報道人が来ているか」と冗談を言ったことを思い出し税関を通る。と“ヌン峰、祝登頂”の横断幕を持った1人の男性が私達にバラを手渡してくれた。つるさんのご主人である。

たった1人の報道人だったがことばでは表現できないあたたかさを感じ、みんなで戻ってきたうれしさを改めてかましました。山旅のつづきがあった。

インド、印度、インド、印度……そこへ入り込めばのめり込んでいきそうなベタ臭い、生きるにおいのする混沌とした魅力をもった国——通りすぎて来たインドへの、いま、体に残っている印象である。“疲れたら休めばいい、明日は明日の風が吹かあ——”といういいかげんな私でも少しは受け入れてくれるような気がする。その時は頭のとっぺんから足の先までカレー味になって山旅の続つづきをしたいと思っている。

ヌン Exp を終えて

寺 沢 玲 子

ムスリム圏内での女性隊、しかも連絡官も女性ということで、周囲の心配もかなりあったと聞くが、不思議な程、順調であった。

ただひとつ自分自身残念なことは、お互いの確認不足から誤解を生じる行動をとったと思われる事である。幾度も言われた“崑崙からの流れの遠征”であったとしても、崑崙隊とは無関係な隊員が5分の2はいるという事を認識し、もっと腹を割って話をしてもらえたら、小さな誤解はすぐに解消されたのに、と思うと残念で

ならない。次回、今回のヌンのメンバーで再び遠征を、という声が出た時、果して今回と同じように、“ヌンからの人ではないから、途中で遠征を放棄したら、淋しいことである。

全員が少からず遠征の体験者であり、大人である。もう少し広い目でお互いを見、意見を出し合えたなら……最高である。

遠征隊が増えたとは言え、一般的に見たらまだまだ一部の登山者の間だけでのことである。せっかく出会えた各国の登山愛好者同志、打ち



溶けようと話かけるのは、果してそれ程見苦しい事だったのだろうか。

いろいろ考えるに、不審不快に映った私の行動は、私自身の人格のなさに起因しているのであろう。それを思う時、気心知れた者以外を組んで遠征することは良策と言えないような気がする。しかし、現代の遠征を想う時、それでは遠征に出る事自体、難しくなる。つまるところ私自身が、もう少し真当な人間になるという事が先決なのだという結論に達する。

このような私を隊員としていてくれたヌン隊の仲間感謝すると共に、皆もう少しダイレクトに意見を交わせたらと思う。

根本が登山家ではない私は、頂上へ立てなかった事への悔いはない。全くないと言えばウソになろうが、いろいろな事をひっくるめて、これが己の実力なのだと素直に認められるから、やはり悔いはない。全員が健康で帰国出来た事が、何より嬉しい。

次回は、やはり想い続けたキンナウルへの入域を、是非とも実現したい。キンナウルへ、スピティへ、レオバルギャルへ、そしてチョモラーリへと、夢だけは拡がっていく。この夢のひとつでいい、実現出来たとしたら、本当に幸福である。高さよりも未知の地への憧れが、私にはある。

ヌン回想

貝塚珠樹

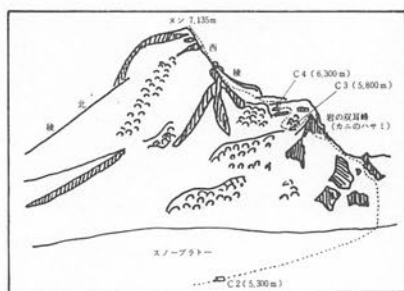
1月末、山の例会の後、たまたま立ち寄ったアンナで森さんから「ヌンのEXPの話があるわよ。行ってみない？」の一言で、心ときめき、「女性パーティーなのよ」の二言で、さらに興味が倍増した。普段は男性群の中に混じった山行しか組めず、女性パーティーに興味をもっていた時期であった自分にとって、これは魅力的だった。「女性同志の山行ってどんなものかなあ、素朴な興味からだった。これはまさに降って沸いた話だった。チャンスは生かしてみようと一週間後には参加の意を伝え、さっそく勤務部所の婦長へこのことを告げる。「山へ行く」この一言で、次の言葉は決まっていた。「また山かい。もう、仕方ない。病気みたいもんだからねえ」看護婦の言葉も同じであった。呆れながらも、励まして送り出してくれた気持ちが嬉しかった。そして3月には円満(?)退職。北大は2度目の退職となった。日頃から「金ない、金ない」とぼやいているのを知ってか知らずか、

職場の仲間から多大なカンバが集まり、また励ましの言葉に送られてただただ有難い一言に尽きた。

「たかが山。されど山。」山登りを知ってか知らずか、それにしても個人の単なる趣味でしかないはずの山登りに、皆が声援してくれたこの気持ちが大きな励みであったし、決して皆の行為を無駄にはしなかった。

準備と同時に遠征費も捻出しなくてはならない。大きな声で言えないけど、バイトをかけもち日昼は企業廻りに、自転車をこいだ。とにかく時間がない。削れるのは睡眠時間のみの生活が続いた。そして7月26日、やっと出発できた。日本を出てホッとする。あとはやるだけ、やるしかない。送り出してくれた皆の顔が浮かんでくる。

というわけで始まったヌンEXP。出発前というのは何かと忙しいものだが、ギリギリまでバタバタのし通しだった。



それにしても5人パーティー。泣いても吠えても5人。一致団結あるのみ。梱包作業も、荷物運びも、殿方に比べりゃPowerもないし、遅いけれど、一つずつ皆で消化していけるとところに妙に感動して、「フン、これが女子隊か」などと一人ニマニマしたりして。山に入ってから、「苦しい」の一言のはずの荷上げも妙に嬉しい。少しずつ高さがUPするたび、「へーここまで来た」なんて驚き半分。不安も少々。いつ高度の影響でブツンしちゃのかと思いつつ、それでも少しずつ山に近づいてくると、がんばり心も出てくる。とにかく精いっぱいやってみようと毎日が過ぎ、そして、いつしか頂上へ。

目の前が開け、180度の展望を前に小泉さんが涙声で無線交信をしている。「ココハ頂上ナノダ」カルマと3人でヒシッと抱き合い、旗を

セットして記念撮影。無線からきこえる皆の声、「登ったんだあ」と改めて実感。もう荷上げしなくていいんだ。今まで一緒にがんばってきた皆。頂上に立ちたかった皆の顔を思うと胸が詰まる。頂上に立てたラッキーな自分。1人の力のはほんの小さなものでもまとまればホント大きな威力を発揮するんだとつくづく感じつつ、暖かく送り出してくれた友人と、無事に登らせてくれたヌンの女神に感謝。山での生活を楽しく過ごせたごきげんな仲間達。なんといっても山登りは楽しくなきゃ。

山登りには男も女も関係ないし、その方法は幾多もあるけれど、背伸びせず着実な登り方をしていきたいナ。

楽しい仲間とごきげんな山登り、これがいい。またどっかにいきたいね。

ヌン、そしてポストヌン

木下祥子

インドから帰国して我家に電話を入れると、ヌン登頂のニュースは北海道の新聞、テレビ等で大きく扱われたと知らされた。市川さんと2人「信じられない。阿部さんマスコミにほど上手に話したのかしら」を繰り返すばかりだった。

後日、新聞等の取材を受けた際、私たちのヌンが報道されるなんて全然思っていなかったの、大きく取り扱われ驚いている。と率直に話すと、阿部淳氏からH A J女子ヒマラヤ登山隊のこと、ヌンのこと等いろいろ伺い、道内の隊員が過半数を占めている隊の明るい話題なので大きく扱った。との答えに、改めて無事に終わった喜びと、責任を感じた。

過去数回海外登山を行ってきたが隊長は初めての任務。しかも出発前の全員揃ってのミーティングを1、2回しか持っていないとわかっており、不安がないと言えばウソになるが、日頃口になっている「目的が一致していれば必ずやれる」の心で臨んだ。

「隊長としてしっかりしなければ……、皆が日頃の力を発揮できるようにしよう……」と自分自身に言い聞かせていながら、実際は思いとは裏腹なことばかりになってしまった。

インドの渉外に係わる失態——関係書類を持参しない等——は入山できないという事態になりかねない問題である。インドの事情に精通し、英語の流暢な寺沢隊員の尽力、エージェントや

リエゾンオフィサーの力添えもあり何とか切り抜けることができた。慎重にやったつもりが、慌しいときの魔の一瞬とも言える空白時に起因するミス。インドの事情がわからないための失敗ならば理解すれば防げるが、うっかりミスは救われない思いがする。

登山活動に入ると、それこそ「目的に向かって」行動するのだが、説明不足や言葉の行き違いがあり必ずしもスムーズにはいかない。日頃の接触があれば正確に伝わるであろうことも、あまり知らない者同士の弱点で、意志に反して言葉だけが一人歩きしてしまう。

そういったわだかまりを乗り越えて皆が頑張れたのは、自称「おばさんチーム」という年の功、そして全員がヒマラヤ登山を経験している強さであろう。あるいは、ヌンの美しさが、あらゆる感情を浄化したのかもしれない。本当にすてきな仲間と巡り会えたことを感謝している。

一つの夢が終わり、次の計画は……、多くの人から質問され、私自身も思い巡らしている。可能性いっぱいの若い頃は様々な夢を描けた

が、平均寿命の折り返し点を過ぎた今、仕事、体力、家庭等を条件に入れての夢である。特に体力、技術の低下を自覚せざるをえなくなると夢もしぼみがちになってしまう。しかし55歳でエベレストに登頂した人や、還暦1年過ぎの6,000m峰を実現させた人たちから刺激を受け、やる気もどってくる。

とにかく私に残された時間は少ない。その少ない時間のなかで何をやるのか。まず、私の所属する山岳会のバミールがある。それから、子供のころからの憧れの地、アンデスやパタゴニアに行ってみたい。1984年に偵察したカラコルムを実現させたい。やはり崑崙、キンナウルカイラス、ヌンと続いたHAJ女子隊、それを取り組んだメンバーとどこかを計画したい。等々夢は限りなく膨んでいく。でも、身体のあちこちに故障が現れバミール以降の見通しは明るくはない。

それにしても、ヌンは大きく美しい山だった。再びスノーブラトールからヌンに向かって夢や悩みを話してみたい。

登山雑感・ネパール紀行

登山雑感

寺沢玲子

神々の御加護か、さしたるトラブルもなく2
隊員と1高所ポーター登頂という成果を得たス
ン峰登山の後始末を終えた私と貝塚は、ひょん
なことからマナリ登山学校の生徒達と数日間寝
起きを共にする機会に恵まれ、インドのナマの
登山に接することが出来た。以下つたない文な
がら、知り得たこと、感じ入ったことなどを記
してみたい。

現在インド国内には、ダージリン登山学校
(Himalayan Mountaineering Institute=H.
M.I) とウッタルカシ登山学校 (Nehru Insti-
tute of Mountaineering=N.I.M) の2つの
国立登山学校がある。特にH. M. Iは1953年
時の首相ジャワハラル・ネルーが、エドモント
・ヒラリーと共にエベレスト初登頂を成し遂げ
たテンジン・ノルゲイを実技指導者として迎え
て設立し、ネルー亡き後は故インディラ・ガン
ジーが自ら理事長を務めたという「名門校」で
あるため、今も一番人気のある登山学校である
という。ちなみに、初代校長の故NANDU.J.
JAYALは、1986年H A J主催インドヒマラヤ
会議のゲストとして来日したIMF副総裁
NALNI.D.JAYAL氏の従兄にあたる。

その他州立の登山学校が3つ、陸軍登山学校
が1つあり、近々カシミールに国立登山学校が
設立されるという話も出ている。市民レベルの
山岳会は、1985年現在122あり、その他ITB
P (INDO-TIBET BORDER POLICE) NC
C等のチームを含めると、約150近い山岳団体
がある。しかし、日本とは違い登山は全てIM
Fの許可制となっており、1988年には市民山岳
会レベルでは初めてのカンチェンジュンガEx
p.も計画されており、インド山岳界は目覚し
い活躍ぶりを見せている。

今回我々が訪れたマナリ登山学校 (Mount-

aineering Institute and Allied Sports) は
ヒマチャル・プロディッシュ州立の登山学校で、
校長のCol.プレムチャンドは、1976年日本山岳
会との合同で、ナンダデヴィに登頂している。

さて、何故に我々がマナリ登山学校の生徒達
と行動を共にすることになったか、不思議にお
思いの方々のために、簡単な説明をしておきた
いと思う。

1986年夏、我々H A Jの女性会員5名は、I
MFとの合同で、はるかインナーラインの内側
にある、キンナウルカイルスを目指していた。
結果は諸事情で敗退し、なまじテレビや新聞で
大々的に騒がれていたため、その後マナリで開
催されたヒマラヤ会議中、いろいろな人からあ
れこれ詮索される羽目となった。時が過つ程に、
薄れていくと思っていたキンナウル再訪の夢は
ますます膨れ上り、何とか入域許可取得を、と
頑張ってみたが、所謂個人レベルでは不可能で
あった。

ふと、キンナウルに入域出来なかったら、マ
ナリでトレッキングをしないか、との登山学校の
インストラクター、マハビール・タフルの
手紙を思い出し、マナリを訪れることにした。
早朝デリーを発ち、深夜雨のマナリに着いた我
々は、そのまま登山学校へ行くのが億劫で近く
の安宿に転り込み、翌日マハビール宅を訪ねる
と、相変わらず多忙の彼は上級コースの引率で
山へ行って留守。メッセージがあり、一切の面
倒は見るので、マカルペーのBCまで上ってこ
いとのこと。夫人に食糧を分けてもらい、翌早
朝彼等のB・Cベアスクンドへと向かう。2日
はかかると言われていたものの、いくらなまけ
者の我々でも身体は順化していたので、1日行
程である。途中登山学校の小屋で、やはり基礎
コースの引率をしていたインストラクター、ラ

ジープ・シャルマに会う。彼もまた84年H A Jとの合同でマモストンカンリに登っている。大歓迎を受け、親切にも自分達の予定地を越え、マハビールの元まで我々を送り届けてくれる。

聖地の1つでもあるベアスクンドは、真に別天地である。聖なる湖ベアスクンドで聖者が剣想している時に出来たのが、ラーマ＝ヤナだとか（もっとも、この手の話はあちこちの聖地で言われているが）。

翌日、近くに幕営していた女性達が集団で来て、マハビールに何か話しかけている。ニヤニヤしながら彼が説明するには、彼女達、ヌン登頂者の貝塚のサインが欲しいという。いたずらっぽく笑って貝塚がO.Kすると、アッという間に人の輪が出来、彼女が書いた日本語のメッセージを英訳してくれ、とその輪が私に移動してくる。マハビールと2人で笑っていた私までが巻き込まれてしまう。そのうち、1人の女の子が私をテレビで見たことがあると言い出し、騒ぎは増々すごくなる。まるで新宿アルタ前である（よくスターがファンにとりかこまれている）。それもそのはず、娯楽の少ないインドで、我々のキンナウル隊がシムラで録画された時のフィルムを、何と4回も流していたのである。

いい加減疲れて来た頃、今度は愛くるしい貝塚は写真責め、疲れた1日だった。

その後生徒達と一緒にマカルペーのC 1へ上

り、彼等の雪技訓練を見学する。擦り減ったアイゼンやピッケルはもちろん、登山靴からセーターにいたるまで、全て登山学校の備品である。足にフィットするはずなどない靴で、ひどい靴ずれに悩み、泣きながら訓練を受ける生徒を見ると、まるで己の学生時代を思い出す。

翌日、生徒の1人がマハビールから、上級コースからの脱落を言い渡され、男泣きに泣いて懇願している姿があった。結局は最低点で上級コース卒業資格はもらえた様であった。

その後、マカルペーへアタック態勢をとる彼等と別れ（結局はマカルペーは中止、マナリピーク、フレンジシップ、シティダハールに変更した）下流に幕営している基礎コースの生徒達と3日間過ごす。基礎コースからも42名中3名の生徒が脱落していった。男泣きに泣きながら山を降りていく姿は、見ている側が辛い。

インドという国の登山事情を知るにつけ、己がいかに恵まれた環境で登山をしているかを感じ知らされた気がする。己の自由意志で望む山に登れることの幸福を、改めて感じ入っている。しかしその反面、彼等の内に見たひたむきさが、今の自分にはないことが淋しくもあった。

田部井淳子、山田昇、そしてリタ・ゴンブーへのあこがれを眼を輝かせて語ってくれたインドのクライマーの卵達の明日に期待したい。

ネパール紀行

貝塚珠樹

めざせジリ

9月5日に隊を解散してから、北インドを放浪し、10月14日にはネパールに向かうべく、バスでデリーを後にする。同行するのは、EXPのコックのラクパ少年とその友人3名。デリーからラクナウ、ソノウリ、とバスを乗り替え、40時間後にやっとカトマンドウに辿りつく。長いバスの旅だった。

ラクパの家はリーロクンブのパプロ。ちょうどジリからルクラまでのトレッキングコースの中間地点にある。ヌンのBCで遊びにいくからヨロシク。と話していたのが本当になってしまった。ちょうど10月22日から始まるティワールのお祭りに合わせてのラクパの帰省に運良く、くっついていくことになった。ラッキー!

カトマンドウで雑用を済ませ、友人らと別れてジリまで再びバスの旅。バスの予約も一仕事。前日にやっと手に入れたシートでも当日は早くから席に着いておかなくてはなくなってしまう席取りゲーム。ジリへ向かうバスは超満員。2人掛けのシートは3人掛けになり、通路もびっちり人が並ぶ。おまけに今日はあいにくのザーザー雨降り。人の熱気で車内ムンムン。もう最悪。トイレタイム等で外へ出るのも、シートをまたいで人の頭越しにアクロバティックに出るありさま。途中自分のチャッペル(スリッパ)がなくならないように足の指にぐっと力をこめるのがコツ。ようやく戻ってきた自分のシートには赤ン坊を抱いたご婦人が何くわぬ顔で座っている。どんなに話したところでも一向にどく気配はなし。2人掛けシートから、5人になる。雨はいよいよ強くバスの中は雨もれ始め、もう全身びしょぬれでベタベタ、おばさんをヒザの上

に乗っけて、チャッペルはいつのまにかどっかへぶっとんでしまった。"もうなるようになれ。"赤ン坊の泣き叫ぶ声とバスのブンブンうなり声を聞きながらトロトロ眠りこけるうち、チャランギでバスが止まる。(!?)膨れあがったバスの中から人がドッと飛びだす。ラクパが "Hurry Up!" と荷台へ駆け登り、ザックを落ろす。何だかわけのわからないまま、皆走っている方へついていく。



「なるほど!」橋が崩壊しているため、向こう側の道路で待っている1台のバスに向かって、沢を越えての障害物席取り競走なのダ。おばさんたちも頭に荷物をぶら下げ、赤ン坊を抱きながら足早にゴールをめざす。いやいや遅ましい。雨と汗とドロで不快この上ない。やっとたどりついたバス。必死に席取りを果たしたラクパに拍手しつつバスに入ると、なんとオーバーブッキング。やれやれ。おまけにバスの故障。ほとんど絶望的。ホントに動くのかしらと待つところ3時間。奇せき的にエンジンがかかる。一気に人が飛び乗る。全てが機敏。モタモタしていると取り残されてしまう。人は後から着いたバス1台分の人間まで加わり再び超満員。左右によろめきながらオンボロバスは動きだす。

「ジョンジョン！」（「行け行け」）活気の戻った乗客と一緒にバスをバンバンたたく。無事にジリまで着くかしらと心配しつつもいつしか眠りへ。「パッパアー」かん高いバスのクラクションの音。人のざわめき、電球の明かり。「着いた。ジリだ！」やっと着いた。

そしてラクパの家へのここはスタートなのだ。まだまだ先は長い。



めざせラクパの家

天気はすかっばれ。ザックの中はお茶や砂糖やアメ、他にみやげ品をずっしり買いこんでどっしり重い。身軽なザブザック1つでスイスイ行くトレッカーを横目でみながら、登り下りのある道をひたすら歩く。だんだん畑が驚くような所まで続き、家が点在する。透明な朝の光の中たくさんのポーターと抜きつ抜かれつ「カンジャンー（どこ行くんだ）」、「パピロジャンー（パブロだよ）」言葉を交しながら歩く。毎日の言葉も一つずつ増えていくのが楽しい。立ち寄るパッティーもラクパの顔見知りで何かと話がはずむ。どこのパッティーも働きもののデデ（娘さん）が活気よい声を出している。何もない山での暮し、それでも人々はジリから物を調達し、毎日重いドッコを頭につけて運ぶ。考えられない程厳しい環境の中それでも人々の生活はある。素適な笑顔の中イキイキと逞しく生きている。たまらない。スリッパばきのポーターはスタスタ山道を歩く。陽が暮れても懐中電灯は手にしない。真暗な山道をひたすら歩く。唄いながら歩く。パッティーでチャンを飲み、ワイワイ語り、また歩きだす。そして木の

下に焚火で暖をとり、毛布1枚にくるまって眠る。強い人たち。人間の可能性をみせつけられる想いだ。バンダールで1泊。セテで2泊目、途中デオラリ峠（2,720m）とラムジュラ峠（3,530m）2つの峠を越える。3日目、もう少しダ。というわりに一向に着かないパブロを求めてひたすら歩く。

陽もとっぷりくれた頃、やっとラクパの家へ到着。山の奥また奥。呆れる程遠い所からポツリポツリと家が点在する。犬が激しくほえる。長い道のりだった。これがラクパの帰省。

タマング族のラクパの家。両親と8人の弟妹。みんなとってもいい顔をしている。炉がひとつ。石を3つ立てて、土で囲めただけの質素なもの。マキが赤々と燃えて、それを囲んで一家団らん。ホッと安心できる場だ。今日までの疲れが一つずつほぐれていく。パブロのおいしい「アルー（じゃがいも）」をたらふく食べ、チャンとチャイをたっぶり飲んで一休み。焚火にあたって心が暖まる。

そういえば今日は「ティワール」のお祭のはずなんだけれど、それらしい物は何もない。「はておかしいナ」と思っていると20時ころより、遠くから太鼓の音が聴こえてくる。急に皆立ち上がり、タナを拭いたり床をはいて掃除を始め、家中の調度品全てに花をつける。そして箱の中にお金を入れ、ちぎった花と米をその中に丁寧に合掌しながら投る。1人ずつ入れ替わり、祈りを捧げる。厳粛な中、焚火で浮かび上がる、祈りの姿が美しい。

ロキシーを飲んですっかりハイになる。そして皆で土間で雑魚寝。夜間、0時過ぎにマンドル（太鼓）の音で目覚める。「きたきた」と皆突び起きる。玄関に行ってみると5、6人のデデがリズムに合わせてステップを踏む。そこへ新しいネパール衣装を身につけた男の子が力強くステップを踏みながら混じってくる。闇の中、懐中電灯の明り一つに浮き出された彼らの姿は本当に生き生きしていて、夢をみているようだ。踊りもしだいに激しく、家の中へ入る。焚火の前に人々は飲み唄い、踊る。今日は女の子の祝福の日。



離れた所に住んでいる山の人はこうして村の家一軒ずつ回り、お互いのコミュニケーションを図り、未婚の男女の出会いの場となる大切な祭りでもあるわけだ。ラクバも懐中電灯で1人ひとりデデの顔を照らしている。"フッフッ。いいなあ、思わずこっちまでニコニコしてしまう。皆、とってもいい顔してる。翌日、男の子のブジャの日、男の子は土間の敷物の上に坐わり、姉妹が1人ずつの首に花輪をかけ、額にテッカーを塗り、牛乳をのませ、ザブジーのマトンを食べさせてあげる。とっても神聖な儀式。昼間はマンダル片手の男の子が各家を回り、あちこちで踊りの輪ができています。

そして夜、激しい雨で今日は来るかなと思いつつ眠りにつく。深夜1時半。近ずいてくるマンダルの音で目覚める。来た来た！リーダー格の年長者の掛け唄に合わせて「デオシーレ」のコーラスが続く。皿に盛られたお金をみては"もう少し、とせがみながら踊りは続く。その時の唄文句も、その時のアドリブ。家人とのやりとりが楽しい。金額が満足しないうちはなかなか居間の中へ入って来ない。しだいに服をめくって、お尻を向け、"もっとよこせ。"とやり

とりが続く。そのアドリブが周囲の笑いを誘う。そのグループによってリーダー格のうまさが出てくる。家人もこれでおしまい。とパイサ（小銭）を投げこむ。それをじっとみながら、もうこの辺でいいかなと合図を送りつつ大きく手をたたきながら、歌がいつそう大きくなり、やがて盛られた米と花びらの皿を別の皿に移しながらスローテンポで唄が続き、それが終わると、どっと家の中になだれこむ。ロキシー、チャンが注がれ再び踊りが続く。こうして彼らは夕方まで各家を回り歩く。

ティワールの3日間は歌と踊りと酒と寝不足で過ぎていく。彼らのもうれつなpowerには、はたまた脱帽。

デデの結婚式

ネパールでの生活は書きだしたらきりがない。何しろ毎日が新しい感動編ばかりなのだから。

ラクバの家へは2往復した。1度目がティワールのお祭り、2度目は、19歳になるラクバの妹の結婚式と、チョンゴンパでの祭りのため。2度目の訪問は12月15日、懐かしい家に帰ってきた。丘の上からデデが2匹の犬と共に走って歓迎してくれる。10月にはあったさとうきび畑も、とうきび畑も刈りとられ、ガラッと広い茶色のだんだん畑が寒々としている。チョンゴンパでは年1度のマネルンゼという大きな祭りではるか遠くからどどん人々が集まってくる。満月の夜、人々は飲み唄い、踊る。あちこち自然



に踊りの輪ができ、ハーモニカ1つと人々の歌ですごい熱気。飾り物は何もなくても、人が集

まり、そこで笑いがおこれば、それで祭り。プログラムが終わり、誰も居なくなった寺の境内でシェルパダンスが始まっていた。腕を組んだ円陣が、ステップを踏む。どっしり大地に響く、くつの音。民族の音がいつまでも響いていた。

あちこち焚火で暖をとる。誰も何も話さなくていい、聞こえるのは鼻水をすすする音と木の燃える音だけ。静かな、暖かい時間が過ぎる。本当に人々は朝まで踊り続けていた。

呆れる程、たくましい人々。おかげでずっと寝不足だ。

デデは隣りの家へお嫁入りとなる。父さんが決めたことで、デデは「まだ結婚はしたくない。カトマンドウにも行ってみたい」と涙する。でも仕方ない。

村では同じ日に2組の結婚式。さしずめ、大安の日なのだろう。村の長老達が日程を決めている。前日は人々が集まってロティ（とうきびの粉を練って油であげたもの）づくりに忙しい。祭りごとにはかせないものだ。チャン、ロキシーの準備も整った。

当日、父さんはヤギを2頭カットする。巧みな手さばきで、きれいに解体される。男たちの手によって畑の広場に小屋が建てられ準備が進められる。そして夕方、向かいの丘から高らかに音楽が聞こえてくる。とっぶり陽が暮れた頃、たいまつを先頭に新郎側が、ゆっくり踊りながらやってくる。広場について踊りがあり、食事をしてから、白装束をつけた新郎がおぶさり、家の中へ入ってくる。長老の先頭がラッパを吹きならし、感動的な一コマが流れる。村人の数もしだいに増えてきた。家の中は80人近くは居るだろうか、入りきれない。デデは隣の家に身を隠し、呼びに行くまでの間、人々は待ち続ける。やがて、タマン族の踊りが始まる。静かで単調なメロディーの中一つ一つに物語がある。人々が口ずさむこの歌もまた民族の臭いがブンブンだ。80歳を過ぎた祖父たちも元気いっぱい、嬉しそうだ。カメいっぱいのロキシーを空にするまで、デデは呼びに行けない。酒をくみ交しながら人々は、益々、パワフルになっていく。やがて長老達はこの結婚がうまくいくかを占な

う。そして、新郎がその前に引っぱりだされ、ニワトリの首と足をククリ(刀)でカットする。一発でうまく切れると、大きな歓声と共に一段と踊りが激しくなる。



そして3時ころ、ようやくカメも空っぽになり、新婦を呼びに行く。

アマ(母さん)が買ってくれた白い布をかぶり、デデが家に入ってくると、場はさらに熱気をおびる。

朝が来た。今日もオリオンが東から西へ傾むくのを見てしまった。明るくなると最後のクライマックス。踊りはさらに激しく、部屋中の人々が手を振り上げ、まさに酔いしれている。親戚の者が新郎新婦の額に、牛乳をつけた米をつけていく。そして顔中米だらけになったところで、デデはラクバに背負われ、外へ出る。最後の祝福を両親から受け、あの気性なデデが涙ぐんでいる。

やがて歓声と共に人々は駆け出す。ラクバに背負われたデデは新郎側に引きずり落ろされる。それを守ろうとするラクバ家。一見、ケンカが起きたのかとみえる激しい応酬。ヒマラヤの白い山々の下、歓声や、ラッパと共に「ヨメをさらったぞ」といわんばかりに踊りながら去っていく。

全てが美しいフィルム。今でも鮮やかに蘇る。ヒマラヤの奥のほんの小さな村の一つのドラマ。ほんのわずかな出会いだったけど、とても大きな収穫だった。今頃何してるかな。あの寝不足の日々が懐かしい。いつかまた彼らに会いに出かけよう。

EXPEDITION REPORT

PEAK-----Mt.NUN(7135m)
AREA-----Sentik Glacier(North of Tangol)
STATE-----Jam & Kashmir
NAME OF TEAM---HAJ LADIES HIMALAYAN EXPEDITION 1987
LEADER-----Ms.Sachiko KINOSHITA
DURATION---26th July to 5th September 1987
(Date of arrival at Delhi to date of departure from Delhi)
*Climbing duration(Base camp to base camp)
-----4th August to 29th August 1987
ABOUT THE PEAK---Mt.NUN is surrounded by Parkachi Glacier, Shufut Glacier and Fariabad Glacier and had been climbed in 1953 by French team led by Bernard Pierre.
TEAM COMPOSSITION--5Japanese ladies,one Liaison officer, one cook and 2 high altitude porters.

PROGRESS

26 July

We reached and stayed in New Delhi.

27th July

Preparations and arrangement for climbing.

29th July

30th July

We moved to Srinagar by air plane.

31st July

Preparations and arrangement in Srinagar

1st August

We left Srinagar.

2nd August

We reached Kargil at 1:00 A.M.. After arrangement and greeting we started to Tangol.

3rd August

We went to our base camp and return in order to adapt high altitude.

4th August

Established our base camp. We went up our base camp and stayed except Mrs.Terasawa and Miss Kaizuka because Miss Kaizuka was high altitude sickness.

5th August

Many baggages were carried to camp 1 and all members stayed base camp.

6th August

Established our camp 1(4800m).

7th August

Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa went up to camp 1 and stayed. another members returned to base camp and stayed.

8th August

Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa went up to snow platoo to open our route. They saw Spanish team at North-West ridge

9th August

Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa went down to base camp and others went up to camp 1.

10th August

Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa rested at base camp. Another members carried to Snow platoo and returned to camp 1. But Mrs.Terasawa and Miss Mala HONNATTI who was our Liaison officer went down to base camp because Miss Mala had headache.

11th August

Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa went up to camp 1 and Miss Kinoshita and Miss Kaizuka went up to camp 2 and returned to camp 2. Mrs.Terasawa rested at base camp.

12th August

Established camp 2. Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa went up to camp 2 to open our route to camp 3. Others stayed at base camp.

13th August

Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and one high altitude porter named Kalma sherpa were opening our route. Mrs.Terasawa and another high altitude porter named Passan sherpa went up to camp 1 with many baggages. Miss Kinoshita and Miss Kaizuka rested at base camp.

14th August

Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and Kalma made the route and after they went down to camp 1. Miss Kinoshita and Miss Kaizuka went up to camp 1. And Mrs.Terasawa stayed camp 1 because she had heavy loose bowels and heavy fever.

15th August

Miss Kinoshita, Miss Kaizuka and Passan carried to camp 2. others rested at camp 1. Miss Mala also went up to camp 1 in order to join us.

16th August

Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and Kalma went up to camp 2 and stayed. Miss Kinoshita and Miss Kaizuka carried to camp 2 and returned to camp 1. Mrs.Terasawa and Passan went down to bring down Miss Mala and carried from camp 1.

17th August

Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and Kalma were opening route and stayed at camp 2. Miss Kinoshita, Mrs.Terasawa, Miss Kaizuka and Passan rested at camp 1.

18th August

Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and Kalma were opening route and stayed at camp 2. Others carried to camp 2 and returned to camp 1.

19th August

Mrs.Koizumi and Kalma were opening route and stayed camp 2. Others carried to camp 2 and Miss Kinoshita and Miss Kaizuka stayed camp 2. Mrs. Terasawa, Miss Ichikawa and Passan returned to camp 1 because Miss Ichikawa was high altitude sickness.

20th August

Mrs.Koizumi and Kalma went down to camp 1 to rest. Miss Kinoshita and Miss Kaizuka carried to camp 3 but Miss Kinoshita was high altitude sickness so they returned to camp 2 and stayed. Miss Ichikawa rested at camp 1. Mrs.Terasawa and Passan went down to base camp because one member of Spanish team was high altitude sickness. They carried to camp 1 and stayed camp 1.

21st August

Miss Kaizuka rested at camp 2 and Miss Kinoshita went down to base camp because she was high altitude sickness. Mrs.Terasawa and Passan carried to camp 2 and stayed. Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and Lakpa rested at camp 1.

22nd August

Mrs.Terasawa, Miss Kaizuka and Passan carried to camp 3 and stayed camp 2. Mrs.Koizumi, Miss Ichikawa and Kalma went up to camp 2 and stayed. Miss Kinoshita went up to camp 1.

23rd August

Established camp 3. Mrs.Terasawa and Passan carried to camp 3 and stayed camp 2. Mrs.Koizumi, Miss Kaizuka, Miss Ichikawa and Kalma went up to camp 3 to make our route to camp 4. Miss Kinoshita went up to camp 2.

24th August

Mrs.Koizumi, Miss Kaizuka, Miss Ichikawa and Kalma opened the route to camp 4 and stayed camp 3. Passan rested at camp 2. Mrs.Terasawa went down to camp 1 to carry to camp 2 and stayed camp 2.

25th August

Mrs.Koizumi, Miss Kinoshita and Kalma rested at camp 3. Miss Kinoshita and Passan went up to camp 3 to encourage. Mrs.Terasawa rested at camp 2. Miss Ichikawa went down to camp 2 because she had heavy headache.

26th August

Established camp 4. Mrs.Koizumi, Miss Kaizuka and Kalma went up to camp 4. Other members went down to camp 1 to clear and to clean camp 1. After we returned to camp 2 and stayed.

27th August

Attack!

5:40 A.M. Mrs.Koizumi, Miss Kaizuka and Kalma started from camp 4.

8:10 A.M. They reached West ridge.

12:25P.M. They reached top of Mt.NUN. They took some photoes and climbed down carefully.

20:40 P.M. they reached their tent of camp 4.

28th August

Mrs.Koizumi, Miss Kaizuka and Kalma returned to camp 2.
Mrs.Terasawa and Passan went up to camp 3 to carry down.
Miss Kaizuka and Miss Ichikawa stayed camp 2 to clean and to make dinner.
All members stayed camp 2.

29th August

All members returned to base camp. We cleaned where we established our tent.

30th August

That day was the last day of our mountaineering life.
We were very busy to clean that place, to pack our baggages.

31st August

We left base camp at noon. From Tangol we took jeep to Kargil.

1st September

3:30 A.M. We started from Kargil to Srinagal. We had to wait till Army's trucks passed so we reached to Srinagal at 20:00 P.M..

2nd September

We returned to New Delhi by air plane.

3rd September

Clear our expedition, information and greeting.

4th September

5th September

Miss Kinoshita, Mrs.Koizumi and Miss Ichikawa returned to Japan.
We broke up our expedition team.

In the end, we have much thankfulness to you. We wish we will be able to promote friendly relation between India and Japan through Indian Himalayan Expedition.

With warm regards and thank you for your kindness,

Yours faithfully,

Sachiko KINOSHITA

Leader of HAJ Ladies Himalayan Exp.
1987

Dated: 10th Dec. 1987

協力者名簿

ICI 石井スポーツ

アウトドアショップULL

味の素ゼネラルフーズ㈱

札幌支店

アポロスポーツ

㈱アルテリア

池田食品㈱

板倉 正美

今村 朋信

内田 文子

エーザイ㈱札幌支店

遠藤 雄悦

大内 論文

大崎 正信

大塚製薬㈱札幌支店

尾谷 賢

お茶の土倉

尾西食品

笠松美和子

春日 真知

カトウ商会

金子 珠実

杏林薬品㈱札幌支店

協和製菓㈱

楠田 愛里

小島 守夫

小林 佳子

小林トシ子

後藤田裕子

小宮山雄二

斉藤 幹夫

斉藤 安平

佐々木孝雄

佐々木裕一

サッポロバイオ

サミットストア

沢田 臣士

サン食品センター

JFCトラベルサービス

塩野義製薬㈱札幌支店

秀岳荘

十條キンバリー㈱

杉林 仁止

関根 幸次

第一製薬㈱札幌支店

大正製薬㈱札幌支店

大日本製薬㈱札幌支店

大丸水産㈱

高橋 義則

高場 健司

武田薬品工業㈱札幌支店

竹山食品工業㈱

戸谷 薫

中外製薬㈱札幌支店

出口 當

デュラセルバッテリー

ジャパン㈱

寺岡製作所

東京北稜山岳会

東洋水産㈱札幌営業所

東洋大学山岳部

独協大学山岳部

独協大学WV部

長尾 妙子

永谷園本舗㈱札幌営業所

中根 千枝

長水 恵

南指原さゆり

日本アップジョン㈱札幌分室

日本シェーリング㈱札幌営業所

ニエートップ㈱

ハウス食品㈱札幌支店

芳賀 弘

早川 昭子

萬有製薬㈱札幌支店

広川健太郎

福原信一郎

藤沢薬品工業㈱札幌支店

富士産業㈱

不二家製菓㈱北海道事業部

ポッカコーポレーション

ホクレン

パミール札幌チーム

松館 正義

松山 昭

三星㈱

宮内 幸男

宮本 博文

三好 朗

明治製菓薬品㈱札幌支店

森 美枝子

㈱モンベル

山形 正巳

山口由美子

山野辺博志

大和屋食品㈱

雪印食品販売部

雪印乳業㈱北海道支社

吉田 憲治

若林 岩男

渡辺化学工業㈱

渡辺 輝男

編集後記

ヌン・クン山群は訪れる人の多い7,000m峰である。6月～9月に必ずといっていいほど入山している隊があり、日本隊も毎年のように訪れている。したがって、この山群の報告書等の資料類が豊富にあると考え、私達の報告書は資料として残すよりも自分達の記念誌とすることを決めた。

登山終了後にインド、ネパールを旅行した隊員が帰国するのを待って1月末に反省会を持ち、原稿依頼をした。しかし、各職場が繁忙期に入り、原稿執筆どころではなくなってしまった。編集者の職場も忙しく原稿の催促をしないため原稿の集まりが悪く、また校正等の作業も進まず、8月27日・登頂日の発行予定が大幅に遅れてしまった。出発前は、最優先するように心がけた隊務も帰国後は仕事に追われ、そうはできないのが実情である。

隊員の環境も変わった。市川さんは4月の人事異動で保育園が変わり、北大病院を退職した貝塚さんは東京女子医大病院に就職した。それぞれの新しい職場で頑張っている。

一つの夢を実現し、次ぎは……、寺沢さんはすでに中国のゲ=峰のピークにたち、引き続きガッシャールムⅡに登っている最中だ。他の4人は仕事との兼ね合いを考慮しながら次ぎの計画を模索している。

報告書発行で一区切り、いよいよ次ぎの目標に向けて活動をはじめよう。

1988年10月

木 下 祥 子

「カシミールの女神ヌン」

その白き美しさに魅せられて
——1987年ヌン峰報告集——

発行日 1988年12月

発行 H A J 女子ヒマラヤ登山隊1987年

062 札幌市豊平区平岸4条14丁目5番3-303号

木下祥子方

編集 木下祥子

印刷 (株)北海道機関紙印刷所



発行：H A J 女子ヒマラヤ登山隊